彦根市埋蔵文化財調査報告書第58集

平成24年度
彦根市内遺跡発掘調査報告書

平成26年３月

彦根市教育委員会

平成二十四年度　彦根市内遺跡発掘調査報告書

平成二十六年三月　彦根市教育委員会

March, 2014

Hikone Education Bureau
Cultural Asset Division

彦根市埋蔵文化財調査報告書第58集

平成24年度　彦根市内遺跡発掘調査報告書

平成26年 3 月

彦根市教育委員会

例　　言

1．本書は、彦根市教育委員会が、平成24年度に国庫補助および県費補助対象事業として実施した市内遺跡発掘調査の報告書である。

2．本調査は、彦根市教育委員会文化財部文化財課が実施した。調査の現体制は下記のとおりである。

平成24年度（現地調査）

教育長：前川　恒廣
文化財部長：谷口　徹　　文化財部次長（兼文化財課長）：寺田　修
課長補佐（兼文化財係長）：久保達彦
史跡整備係長：北川恭子　　副主査：深谷　覚
副主査：辻　嘉光　　副主査：池田隼人
主　任：森下雅子　　主　任：林　昭男
主　任：三尾次郎　　主　任：戸塚洋輔
主　任：下高大輔　　技　師：田中良輔
臨時職員：佃　昌幸

平成25年度（整理調査・報告書作成）

教育長：前川　恒廣
文化財部長：入江明生　　文化財部次長（兼文化財課長）：西田哲雄
課長補佐：久保達彦
史跡整備係長：北川恭子　　文化財係長：木戸洋平
主　査：深谷　覚　　主　査：池田隼人
副主査：三尾次郎　　主　任：森下雅子
主　任：林　昭男　　主　任：戸塚洋輔
主　任：下高大輔　　技　師：田中良輔
臨時職員：佃　昌幸

3．本書で報告した各遺跡の調査担当者と執筆者は下記のとおりで、執筆者は目次に記載している。編集を戸塚と田中が行った。

西今遺跡（1次）：田中
史跡彦根藩主井伊家墓所：三尾
須川遺跡（1次）：戸塚
道ノ下遺跡（1次）：三尾
竹ヶ鼻廃寺遺跡（8次・9次）：林
須川遺跡（2次）：下高・樫木

4．現地調査及び本報告書の作成にあたり、関係機関・関係者の方々にご協力をいただいた。

5．本書で使用した方位は、平面直角座標第Ⅳ系の真北に、高さは東京湾平均海面に基づく。

6．本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市教育委員会で保管している。

目　次

例言
平成24年度試掘調査・本発掘調査一覧
調査地位置図

第１章　西今遺跡（１次）
1　遺跡の概要――1（田中）
2　調査経過――2
3　調査成果――2
4　まとめ――10

第２章　史跡彦根藩主井伊家墓所（清涼寺）
1　遺跡の概要――14（三尾）
2　調査経過――16
3　調査成果――16
4　まとめ――20

第３章　須川遺跡（１次）
1　遺跡の概要――24（戸塚）
2　調査経過――24
3　調査成果――25
4　まとめ――30

第４章　道ノ下遺跡（１次）
1　遺跡の概要――39（三尾）
2　調査経過――40
3　調査成果――40
4　まとめ――44

第５章　竹ヶ鼻廃寺遺跡（８次・９次）
1　遺跡の概要――48（林）
2　調査経過――49
3　調査成果――51
4　まとめ――56

第６章　須川遺跡（２次）
1　遺跡の概要――63（下高・櫻木）
2　調査経過――63
3　調査成果――64
4　まとめ――73

報告書抄録

平成24年度試掘調査

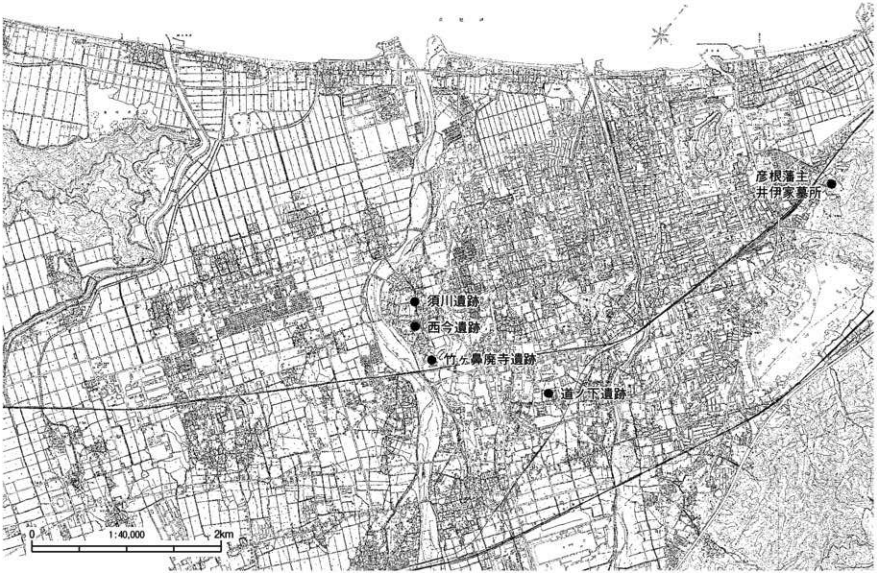
No.	遺跡名	所在地	種類	調査日	面積(㎡)	調査原因	主な遺構	主な遺物	主な時代	費用負担
1	荒神山古墳群	清崎町	古墳	平成24年8月24日	4	燃料貯蔵施設	なし	なし	—	国庫補助
2	稲部遺跡	稲部町	集落跡	平成25年2月5日～7日	36	道路	溝・小穴	土師器	古墳・古代・中世	国庫補助
3	稲部西遺跡	稲部町・彦富町	集落跡	平成25年2月5日～7日	68	道路	溝・小穴	土師器	古墳・古代・中世	国庫補助
4	牛ノ海遺跡	大敷町	散布地	平成25年3月6日	4	集合住宅	なし	なし	—	国庫補助
5	尾末山砦跡	尾末町	城館跡	平成25年1月7日	4	個人住宅	なし	なし	—	国庫補助
6	川瀬馬場遺跡	日夏町	集落跡	平成24年9月20日	4	個人住宅	なし	なし	—	国庫補助
7	川瀬馬場遺跡	日夏町	集落跡	平成25年3月21日	8	診療所	なし	なし	—	国庫補助
8	木戸口遺跡	戸賀町	散布地	平成24年5月21日	8	集合住宅	なし	なし	—	国庫補助
9	木戸口遺跡	平田町	散布地	平成24年10月3日	28	宅地造成	なし	なし	—	国庫補助
10	木戸口遺跡	平田町	散布地	平成24年10月31日	8	宅地造成	なし	なし	—	国庫補助
11	木戸口遺跡	戸賀町	散布地	平成24年1月30日	4	個人住宅	なし	なし	—	国庫補助
12	佐和山城跡	大東町	城館跡	平成24年8月8日	4	店舗	なし	なし	—	国庫補助
13	佐和山城跡	安浦東町	城館跡	平成24年10月17日	20	区画造成	なし	なし	—	国庫補助
14	佐和山城跡	彦根駅東地区21街区	城館跡	平成24年12月7日	4	個人住宅	なし	なし	—	国庫補助
15	佐和山城跡	古沢町	城館跡	平成25年1月23日	16	区画造成	なし	なし	—	国庫補助
16	佐和山城跡	里根町	城館跡	平成25年3月7日	28	大型店舗	なし	なし	—	国庫補助
17	佐和山城跡	古沢町	城館跡	平成25年3月26日	4	個人住宅	なし	なし	—	原因者
18	品井戸遺跡	小泉町	集落跡	平成24年12月6日	2	ATMブース	なし	なし	—	原因者
19	正法寺遺跡	正法寺町	古墳	平成25年1月29日	20	保育園	なし	なし		国庫補助
20	須川遺跡	西今町	集落跡	平成24年6月28日	4	個人住宅	小穴・溝・竪穴建物	瓦質土器・土師器・須恵器	古墳・古代・中世	国庫補助
22	杉田遺跡	川瀬馬場町	散布地	平成24年11月5日	8	ガソリンスタンド	なし	なし	—	国庫補助
23	西今遺跡	西今町	集落跡	平成24年4月24日	4	個人住宅	小穴・溝	瓦質土器・土師器	古代・中世	国庫補助
24	西今遺跡	西今町	集落跡	平成24年11月20日	28	集合住宅	なし	なし	—	国庫補助
25	西今遺跡	西今町	集落跡	平成24年11月26日	4	集合住宅	なし	なし	—	国庫補助
28	竹ヶ下遺跡	野田山町	散布地	平成24年5月29日	4	個人住宅	なし	なし	—	国庫補助
29	田附城跡	南三ツ谷町	城館跡	平成24年9月24日	4	個人住宅	なし	碧	—	国庫補助
30	丁田遺跡	高宮町	集落跡	平成24年10月24日	92	宅地造成	竪穴建物・溝	土師器・須恵器	縄文・古代	国庫補助
31	塚本遺跡	高宮町	散布地	平成23年10月24日	24	工場	なし	なし	—	国庫補助
32	寺村遺跡	日夏町	散布地	平成24年9月13日	4	個人住宅	なし	なし	—	国庫補助
33	中川館跡	下岡部町	城館跡	平成24年8月31日	4	個人住宅	なし	なし	—	国庫補助
34	八反切遺跡	野田山町	倉庫建設	平成24年6月5日	20	倉庫	なし	なし	—	国庫補助
36	一ツヤ遺跡	平田町	集落跡	平成24年5月23日	12	集合住宅	なし	なし	—	国庫補助
37	一ツヤ遺跡	平田町	集落跡	平成24年6月22日	4	個人住宅	なし	なし	—	国庫補助
38	一ツヤ遺跡	平田町	集落跡	平成25年3月5日	4	集合住宅	なし	なし	—	国庫補助
39	一ツヤ遺跡	平田町	集落跡	平成25年3月11日	8	道路	なし	なし	—	国庫補助
40	福満遺跡	小泉町	集落跡	平成24年8月28日	8	駐車場	土坑・小穴	土師器	古墳・古代	国庫補助
41	普光寺北遺跡	普光寺町	散布地	平成24年9月12日	4	個人住宅	なし	なし	—	国庫補助
42	藤丸遺跡	高宮町	集落跡	平成24年8月27日	24	宅地造成	なし	なし	—	国庫補助
43	藤丸遺跡	高宮町	集落跡	平成24年9月14日	12	宅地造成	なし	なし	—	国庫補助
44	藤丸遺跡	高宮町	集落跡	平成24年2月12日	8	集合住宅	なし	なし	—	国庫補助
45	道ノ下遺跡	東沼波町	集落跡	平成24年7月19日	8	個人住宅	小穴・溝	土師器	古代	国庫補助
46	山之協遺跡	小泉町	散布地	平成24年6月28日	4	個人住宅	なし	なし	—	国庫補助
47	山之協遺跡	小泉町	散布地	平成24年9月21日	12	集合住宅	なし	なし	—	国庫補助
48	山之協遺跡	小泉町	散布地	平成24年12月27日	4	事務所	なし	なし	—	国庫補助
49	山之協遺跡	小泉町	散布地	平成25年1月10日	12	集合住宅	なし	土師器	古代	国庫補助

平成24年度本発掘調査

No.	遺跡名	所在地	種類	調査期間	面積(㎡)	調査原因	主な遺構	主な遺物	主な時代	費用負担
1	彦根城跡 （鐘の丸虎口石垣修理）	金亀町	城跡	平成24年6月4日～ 7月30日	6.2	石垣修理	石垣	瓦・石造物	19世紀	国庫補助
2	彦根城跡 （天秤櫓上石垣修理）	金亀町	城跡	平成24年6月4日～ 8月10日	90	石垣修理	石垣	瓦・漆喰	19世紀	国庫補助
3	彦根藩主井伊家墓所	古沢町	墓	平成24年6月18日～ 7月18日	28.75	石垣修理	石垣	磁器・瓦	19世紀	国庫補助
4	彦根城跡（博物館裏下水 道配管工事）	金亀町	城跡	平成24年8月22日～ 8月23日	16	下水道配管 工事	―	―	―	原因者
5	長曾根口御門跡	長曾根町	城跡	平成24年9月10日～ 10月12日	1,259	整備	石垣	陶磁器	19世紀	原因者
6	彦根城跡 （藩校弘道館跡）	金亀町	城跡	平成24年11月30日～ 平成25年3月29日	2,100	整備	石垣・礎石	陶磁器	19世紀	国庫補助
7	名勝玄宮楽々園 （玄宮園社跡）	金亀町	庭園	平成25年1月9日～ 3月29日	51	整備	社	磁器・瓦	19世紀	国庫補助
8	名勝玄宮楽々園 （楽々園坪庭）	金亀町	庭園	平成25年1月9日～ 3月29日	245	整備	庭	磁器・瓦	19世紀	国庫補助
9	西今道跡（1次）	西今町	集落	平成24年4月25日～ 5月28日	130.63	個人住宅	溝・土坑	土師器・須恵 器・灰釉陶器	古墳・古代・ 中世	国庫補助
10	須川道跡（1次）	西今町	集落	平成24年6月29日～ 7月24日	78	個人住宅	竪穴建物・溝	土師器・須恵器	古墳・古代・ 中世	国庫補助
11	須川道跡（2次）	西今町	集落	平成24年11月20日～ 12月14日	70	個人住宅	掘立柱建物・溝	土師器・須恵器	古墳・古代・ 中世	国庫補助
12	道ノ下道跡（1次）	東沼波町	集落	平成24年8月20日～ 8月31日	170	個人住宅	掘立柱建物・溝	土師器・須恵器	古代	国庫補助
13	竹ヶ鼻廃寺遺跡（8次）	竹ヶ鼻町	集落	平成24年8月20日～ 9月7日	67	個人住宅	掘立柱建物・土坑	土師器・須恵器	古代	国庫補助
14	竹ヶ鼻廃寺遺跡（9次）	竹ヶ鼻町	集落	平成24年8月20日～ 9月7日	83	個人住宅	掘立柱建物・土坑	土師器・須恵器	古代・中世	国庫補助
15	薬丸遺跡（4次）	高宮町	集落	平成24年4月25日～ 6月22日	436	集合住宅	掘立柱建物	土師器・須恵器	奈良	原因者
16	丁田遺跡（3次）	高宮町	集落	平成24年12月5日～ 平成25年3月28日	1,324	宅地造成	掘立柱建物・竪穴 建物	縄文土器・土師 器・須恵器	縄文・古代	原因者
17	ーツヤ遺跡（2次）	平田町	集落	平成24年10月17日～ 平成25年3月28日	1,546	幼稚園グラ ウンド造成	溝・掘立柱建物	陶器・土師器・ 木製品	中世	原因者

文化財保護法第93・94条による届出・通知の件数

平成21年度（平成21年4月～平成22年3月）	85
平成22年度（平成22年4月～平成23年3月）	145
平成23年度（平成23年4月～平成24年3月）	166
平成24年度（平成24年4月～平成25年3月）	190



調査地位置図

第１章　西今遺跡（１次）

１　遺跡の概要

西今遺跡は、彦根市北部の西今町に所在する。調査地の南方には鈴鹿山系に源流を持つ犬上川が東流し、周辺にはこれによる自然堤防や後背湿地が分布している。また遺跡の東側には犬上川によって形成された扇状地の扇端部が迫っており、その近傍にあたる当地周辺においては、豊富な湧水が見られる。

歴史的環境としては、西今遺跡の東方には竹ヶ鼻廃寺遺跡や品井戸遺跡、西側には須川遺跡など、古代から中世にかけての遺跡が位置している。これらはいずれも犬上川右岸の自然堤防上に営まれた遺跡であり、概ねその時期を同じくする、一連の遺跡群となっている。

また、西今の集落中心部には、戦国時代には「下街道」、近世には「朝鮮人街道」と呼ばれた、この地域の主要道が縦貫している。西今遺跡一帯は、この街道が犬上川を渡河する地点にあたり、交通上の要衝となっている。

今回の調査地点は、遺構検出面で標高93.60m～93.70m を測り、犬上川の自然堤防上に位置している。地質は、比較的安定した地盤となっており、古くから河川の氾濫等による影響をあまり受けない、比較的安定した土地であったものと考えられる。また、朝鮮人街道に面した立地であり、明治四年頃に作成された『犬上郡西今村耕地絵図』においては、「屋鋪」、すなわち屋敷や店舗が所在した区域として描かれている。

これらの事柄から、今回の調査地点においては、中世後期から近世にかけての、街道沿いに町屋が立ち並ぶ、都市的な空間の存在が想定されていた。

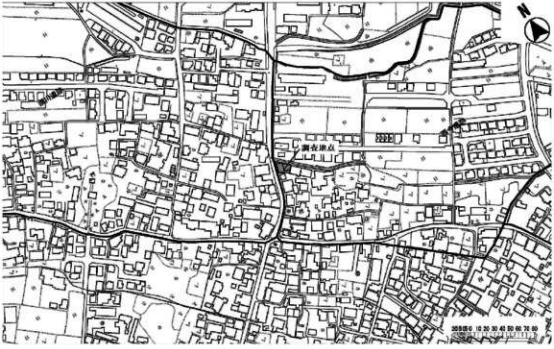


図１　西今遺跡位置図

2　調査経過

今回の調査は、個人住宅の建設に伴う文化財保護法第93条の届出及び調査依頼に基づくもので、西今遺跡の第１次調査である。試掘調査の結果に基づき、遺構に影響の及ぶ建物部分の範囲を調査区として、平成24年４月25日から平成24年５月28日にかけて調査を行った。調査地は、彦根市西今町字東出524番に位置する。調査面積は130.63㎡である。

3　調査成果

調査区の層序は、上層から暗褐色粘質土層（近世～近現代の造成土層）、黄褐色粘質土層（基盤層）となっており、このうち基盤層の上面において、平安時代、中世、近世の遺構を検出した。

掘立柱建物（SB01～03）

SB01　SB01は２間×３間（約4.0m×6.0m）を測る総柱の掘立柱建物であり、先行する溝SD01を切る。また、その主軸は正南北から約30°西へ振っており、現在の周辺街区の方位とほぼ一致する。SB01の構築年代は、出土している遺物から概ね15世紀末～16世紀前半頃と推定され、既にこの時期、現在の街区の原型が形成されていたものと考えられる。

SB02　SB02は調査区内において１間×２間（約2.6m×3.6m）を測る掘立柱建物である。主軸はほぼ正南北を指向する。

SB03　SB03は調査区内において、１間×２間（約2.6m×1.8m）を測る掘立柱建物である。主軸は正南北を指向し、SB02と隣接する。

溝（SD01～07）

溝については７条を確認した。このうち、SD01・SD05については14世紀末～15世紀前半頃の構築と考えられる。また、SD07についてはこれら２条の溝が埋没した後に構築されており、現在の道路と並行する方位に構築されている。この他、SD02・03・04・06の４条については上記各溝の埋没後、近世に行なわれた耕作の痕跡と考えられる。

今回検出した溝は、いずれも現在の周辺区画に概ね一致する主軸を持っていた。調査区内においては、中世後期に構築されたSD01・05等を先駆として、以降はこの主軸が中近世、そして近現代に至るまで踏襲され続けている様子が伺える。

SD01　SD01は、調査区内を南東―北西方向に横断する溝であり、調査区内において長さ約12.70m、幅約70cm、深さ約30cmを測る。

現在の街区と同様の主軸で東から西へと伸び、現在の道路に近い地点において、南側へ約90°屈曲する。また、この屈曲点から南側では、それまで最大約70cm程度であった溝の幅が、最大約120cm程度まで広がるなど、現在の屋敷地の内側寄りと外側とにおいて、規模が変化する様子が確認されている。このことは、現在の道路寄りの地点と屋敷地側の地点との関係について、SD01が機能していた当時においても、異なる領域としての認識があった可能性が考えられる。

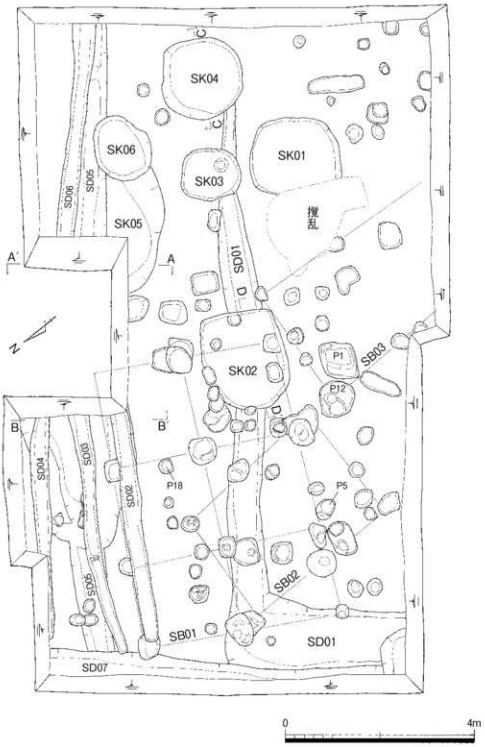

SK04
SK06
SK03
SK01
SK05
撹乱
SD06
SD05
SD01
A'
A
D
N
SK02
P1
SB03
P12
B
B'
SD04
SD03
SD02
P18
P5
SD05
SB02
SB01
SD01
SD07
0
4m

図２　調査区遺構配置図

SD02～04・06　SD02・03・04・06については、いずれも長さ約５m、幅約30～40cm、深さ約20cm を測る近世の耕作痕である。埋土中からは染付片等が出土しており、その時期は、概ね18世紀後半から19世紀初頭頃のものと考えられる。

SD05　SD05は、調査区内において長さ約13m、幅約60cm、深さ約70cm を測る溝である。このSD05については、調査区中央付近において、径約５～８cm 程度の円礫を多量に貼り付けた箇所が確認されている。この円礫は、南岸から溝の底付近まで、密に貼り付けられており、溝の内側に面を持つ形で数個検出された人頭大の円礫と併せて、溝の南岸、すなわち屋敷地側の護岸機能を担っていたものと考えられる。

土坑（SK01～06）

今回検出した土坑のうちSK01～04については、江戸時代後期から幕末頃、SK05については中世前期、SK06については時期不明ながら、その埋土の質から、おそらく近世に構築されたものと考えられる。

SK01　SK01は、長軸約190cm、短軸約1.6cm、深さ約30cm を測る、不整円形の土坑である。遺物の出土が無かったことから、明確に時期を特定することは難しいが、SK02・03・04と同質の埋土であることから、おそらく近世後期頃の廃棄土坑の一種と考えられる。

SK02　SK02は、長軸約210cm、短軸約180cm、深さ約20cm を測る、不整円形の土坑である。

SK03　SK03は、長軸約130cm、短軸約110cm、深さ約20cm を測る、不整円形の土坑である。

SK04　SK04は、長軸約180cm、短軸約170cm、深さ約25cm を測る、不整円形の土坑である。内部からは擂鉢・土瓶等の破片が出土しており、廃棄土坑であると考えられる。

SK05　SK05は、長軸約270cm、短軸は残存部で約120cm、深さは約60cm を測る、不整楕円形の土坑であり、SD05に切られている。内部からは、灰釉陶器や山茶碗の小破片が出土しており、構築時期は概ね12世紀末から13世紀頃と推定される。

出土遺物（１～34）

SB01　SB01からは土師皿小片（６）、施釉陶器片（７・９）、焙烙小片（８）が出土した。

SB02　SB02からは須恵器小片・土師器片等が出土した。

SB03　SB03からは土師器小片が出土した。

SD01　SD01からは、須恵器壺底部（17）、須恵器蓋（18）等が出土した。

SD03　SD03からは、15世紀後半頃と考えられる天目茶碗口縁部（19）、焙烙口縁部（20・21）、陶器鍋口縁部（28・29）等が出土した。

SD04　SD04からは、内面に蛇の目釉剥ぎを施した磁器の碗（22）が出土した。

SD05　SD05からは、下限が14世紀末頃となる三足羽釜の脚部（26）、鞴（フイゴ）の羽口（27）、須恵器坏身（23）、須恵器壺（24）、須恵器碗（25）等が出土した。

SK03　SK03からは、江戸時代後期頃の所産と考えられる陶器皿（10）、土瓶底部（11）、土瓶蓋（12）、染付碗口縁（13）、不明鉄製品（14）等が出土した。

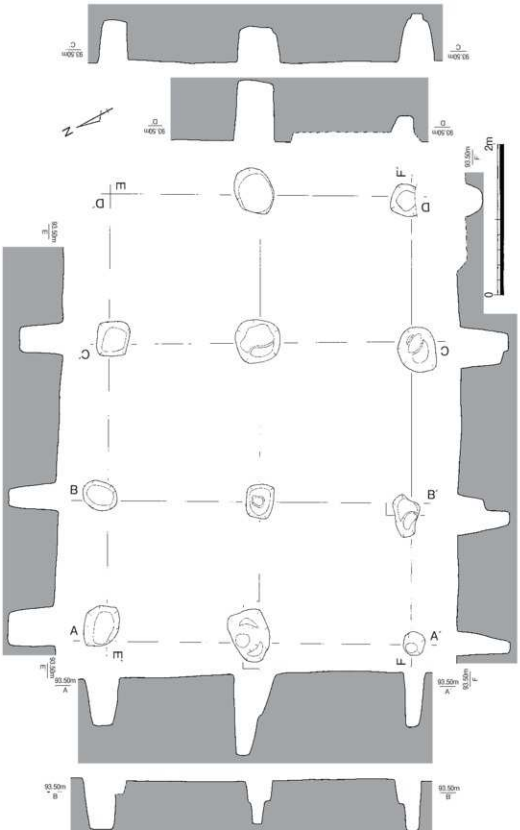

93.50m
C
93.50m
C'
93.50m
D
93.50m
D'
N
93.50m
E
93.50m
E'
93.50m
F
93.50m
F'
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
0
2m

図３　SB01遺構図

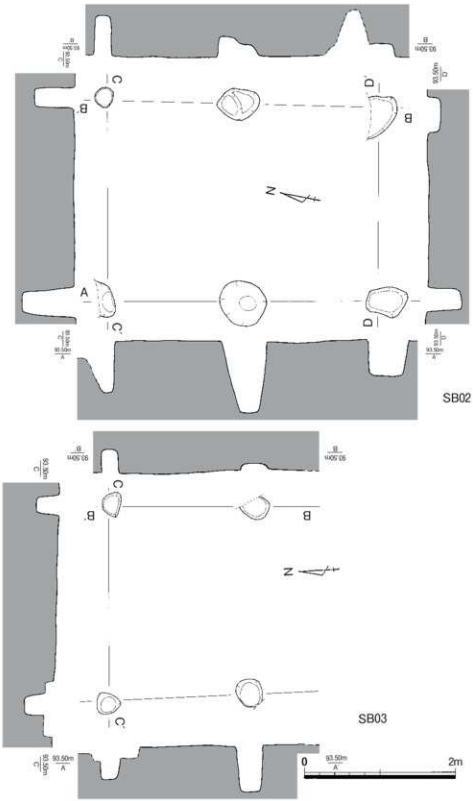
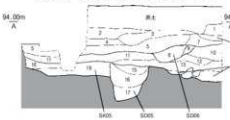


図4　SB02・03遺構図

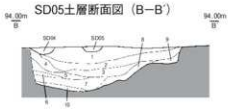
SD05・SK05土層断面図（A－A′）



SD05・SK05土層注記（A－A′）

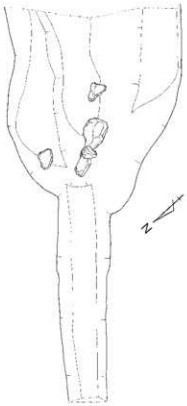
1. 2.5Y4/2　暗灰黄色土
2. 2.5Y5/3　黄褐色土
3. 2.5Y4/2　黄褐色土
4. 2.5Y4/2　黄褐色土
5. 2.5Y4/2　黄褐色土
6. 10Y4/1　灰色粘質土
7. 5Y4/2　灰オリーブ色粘質土
8. 5Y5/1　灰色粘質土
9. 10Y4/2　灰オリーブ色粘質土
10. 10Y4/2　灰オリーブ色粘質土
11. 2.5Y4/3　オリーブ褐色土
12. 2.5Y4/1　黄灰色粘質土
13. 7.5Y4/1　灰色粘質土
14. 7.5Y4/1　灰色粘質土
15. 7.5Y4/1　灰色粘質土
16. 2.5Y5/2　暗灰黄色粘質土
17. 7.5Y4/1　灰オリーブ色粘質土
18. 7.5Y4/1　灰オリーブ色粘質土
19. 7.5Y4/1　灰オリーブ色粘質土

SD05土層断面図（B－B′）

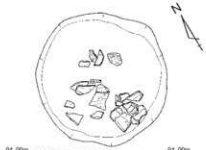


SD05土層注記（B－B′）

1. 2.5Y5/1　黄灰色粘質土
2. 10YR5/1　褐灰色粘質土
3. 2.5Y5/1　黄灰色粘質土
4. 2.5Y5/1　黄灰色粘質土
5. 2.5Y5/1　黄灰色粘質土
6. 2.5Y5/1　黄灰色粘質土
7. 7.5Y5/1　灰色粘質土
8. 7.5Y5/1　灰色粘質土
9. 7.5Y5/1　灰色粘質土
10. 7.5Y4/1　灰色粘質土
SD04. 5Y5/1　灰色粘質土
SD05. 5Y5/1　灰色粘質土



SD05遺構平面図



SK04土層注記

1. 2.5Y4/1　黄灰色粘質土
2. 2.5Y4/2　暗灰黄色粘質土
3. 2.5Y4/2　暗灰黄色粘質土
4. 5Y4/1　灰色粘質土
5. 5Y4/1　灰色粘質土
6. 10YR4/1　褐灰色粘質土

SK02土層注記

1. 10YR4/3　にぶい黄褐色土
2. 10YR4/2　灰黄褐色土
3. 5Y5/1　灰色粘質土

0　2m

図５　SK01～05遺構図・SD01・05土層断面図

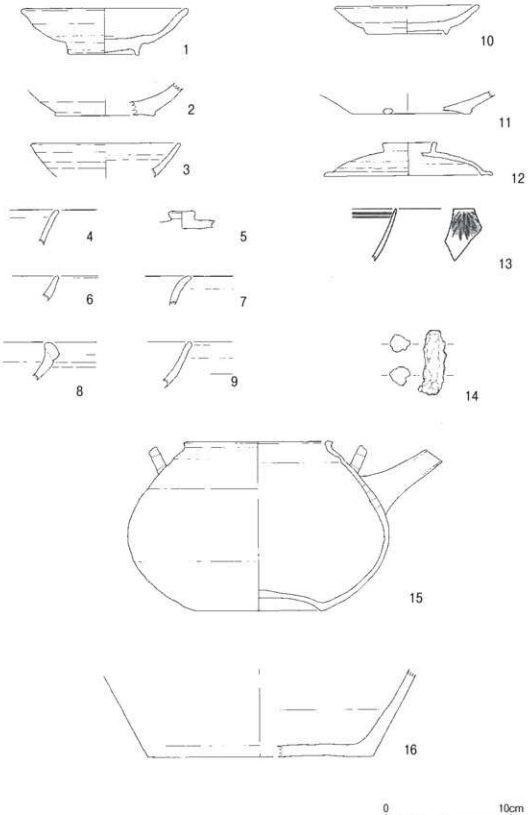


図6　出土遺物（1）

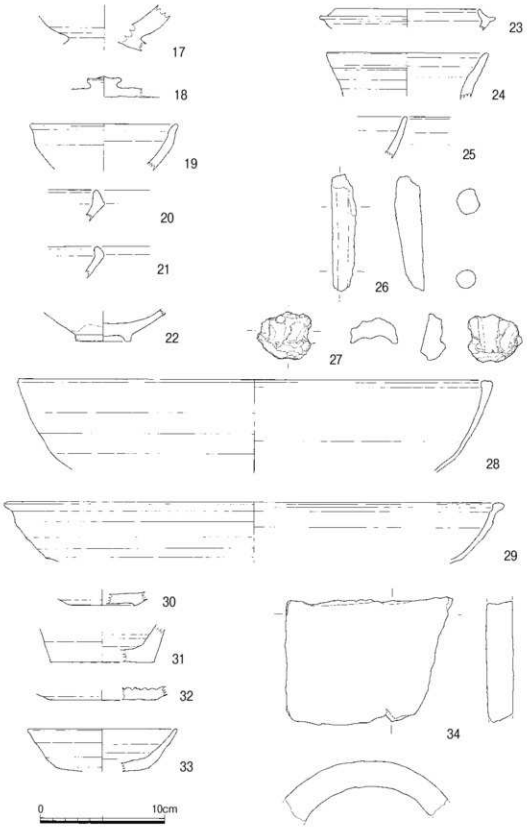


図7　出土遺物（2）

SK04　SK04からは、江戸時代後期頃の土瓶（15）、鉢（16）などが出土した。

SK05　SK05からは古瀬戸卸皿底部片（32）などが出土した。

P１　P１からは、白灰色の釉調を呈する瀬戸美濃産の陶器皿（１）が出土した。時期については明確でないが、その器形から15世紀後半～16世紀前半頃の所産である可能性がある。

P５　P５からは、須恵器底部（２）、須恵器杯口縁部（４）、須恵器杯蓋（５）が出土した。

P12　P12からは、須恵器杯口縁部（３）が出土した。

P18　P18からは古代瓦の小破片が出土しており、近隣にそうした公的な施設の存在があったか、もしくは近在する竹ヶ鼻廃寺遺跡などからの搬入が行われたものと考えられる。

表採資料

表採資料としては、須恵器杯（33）、古代の瓦片（34）、古瀬戸の瓶底部（31）、卸皿（32）、15世紀後半～16世紀中頃の瀬戸美濃産の灰釉皿底部（30）等の遺物が出土した。

4　まとめ

彦根市域においては、古代末から中世にかけての調査事例が未だ少なく、当時の状況については不明な点が多い。特に北部地域における調査事例としては、今回の調査がその貴重な事例の一つとなった。

今回の調査対象となった西今遺跡の東側には、古代の官衙・寺院跡として知られる竹ヶ鼻廃寺遺跡が近在する。また、西今遺跡の西方には、犬上川の河口付近においては古代の青根郷があったとされており、滋賀県立大学の敷地内における発掘調査に際しては、多くの古代瓦が出土するなど、この地に古代寺院があったことが明らかとなっている。

今回の調査では、具体的な古代の建物についての情報は得られなかったが、瓦片が出土するなど、近隣に当時の重要施設があった可能性が出てきた。このことは、古代の犬上川流域の遺跡群のありかたを理解するうえで、新たな知見となった。

中世後期の段階については、概ね15世紀末～16世紀前半頃の遺構・遺物が発見された。特に、総柱によるやや大型の掘立柱建物や、現在の街区の方位に対応する主軸を持った区画溝が検出されるなど、この時期において既に、近世以降の西今の集落に繋がると考えられる集落が形成されていたことが明らかとなった。

以上、今回の調査による成果を概観してきた。今回は、従来極めて情報が少なかった彦根市北部地域における古代末から中世後期頃にかけての貴重な情報を得ることができた。しかし、未だその情報量は少ないことから、今後の新たな知見の増加に期待することとしたい。

1　調査区全景

2　SD05　北半完掘状況

図版 2

1　出土遺物

2　出土遺物

1　出土遺物

2　出土遺物

第２章　史跡彦根藩主井伊家墓所（清涼寺）

１　遺跡の概要

地理的環境

史跡彦根藩主井伊家墓所は、佐和山城跡の西麓に位置しており、戦時中の干拓事業までは前面に松原内湖が広がっていた環境に立地している。この松原内湖は彦根城下町建設に伴う付け替え以前の芹川と矢倉川による堆積作用によって形成されたもので、琵琶湖との境界である松原町付近は磯山までの浜堤が形成されている。内湖干拓事業の当初の目的は、食料増産のための耕作地開発であったが、現在は宅地開発が進んでおり、人口も増加している。

佐和山丘陵については、南北４km にわたって連なる独立丘陵で、チャート系の岩石によって構成されている。標高は233m であり、山麓への斜面は急傾斜となっており、チャート石材の片理に伴って風化し、崩壊した岩肌が露頭している箇所が散見できる。

歴史的環境

松原内湖周辺には縄文時代後期からの複数の遺跡が存在するが、歴史的な環境として江戸時代の大名墓所としての当史跡に直接的に関連するものは、中世から織豊期にかけて存在した佐和山城跡と江戸期以降の寺院及び彦根藩関連施設ということになる。

佐和山城跡については、鎌倉時代初期、近江源氏・佐々木定綱の６男時綱が、佐和山の麓に館を構えたことに始まり、その後、湖南の六角氏と湖北の京極氏、後には浅井氏との対立の中で、両勢力の境目の城として争奪されるようになる。浅井氏の時の城代は磯野員昌であり、織田信長の近江侵攻後は丹羽長秀が城主となった。応仁の乱以後は堀秀政、堀尾吉晴が入り、豊臣政権期の天正18年（1590）に石田三成が城代となった。この三成段階での城下町は佐和山城絵図(彦根城博物館)に見られるように山麓の全域に膨張していたと考えられる。

関ヶ原の戦いに三成が敗れた翌日には佐和山城も落ち、佐和山城には井伊直政が城主として封じられ、慶長９年に彦根山での彦根城築城が開始されることとなる。

佐和山西麓には､江戸時代になるとすぐに龍潭寺､清涼寺等の井伊家縁の寺院が創建され、井伊家にとっての佐和山の意味合いは変化していく｡また､西麓北部には幕末に彦根藩によって火薬庫が造られ、佐和山西麓の公空間としての性格を示すものである。

今回の調査対象である史跡彦根藩主井伊家墓所については、清涼寺境内に所在する。清涼寺は、慶長７年（1602）に初代当主である井伊直政の死去により、その墓所として創設されたもので、この直政以降、彦根で死去した井伊家当主及び藩主、その正室・側室、子息・子女の墓所として墓域を確立していくこととなる。清涼寺の井伊家墓所は、佐和山の山麓を削平し、前面に盛り土をし、この盛り土を石垣によって土留めを行い平坦地を造り出して墓所としている。手前に歴代当主の墓石を７基並べ、その南側と奥には正室、側室の墓石15基、子息や子女33基、その他該当者不明の墓石３基、改易され２代直孝預かりとなった元小田原藩主大久保忠隣（ただちか）の供養塔１基が配置されている。また、かつて墓域内には、先

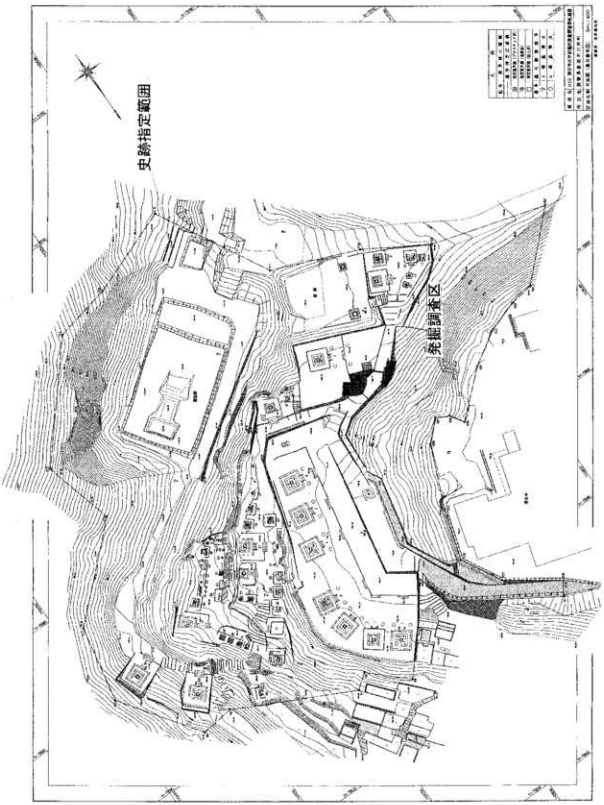


図1　井伊家墓所　発掘調査区

祖崇拝のための施設である護国殿と経蔵が存在していたが、現在は他県へ移され、跡地となっている。

初代井伊直政が近江に入国以来、井伊家は幕末にいたるまで一度の所替えもなく、江戸時代を通じて彦根藩を領したこともあり、墓所としては、国許彦根の清涼寺と江戸世田谷の豪徳寺が護持され、歴代の当主以下、正室・側室、子息・子女ら井伊家一族の多くがこの２箇所の墓所に埋葬されている。現在確認できる墓石の数は、清涼寺が59基、豪徳寺は87基である。なお、４代当主直興は、仏教への信仰心が篤く、永源寺の南嶺慧詢に深く帰依したため、歴代の中で直興のみが、側室とともに永源寺を墓所としている。

2　調査の経過

史跡彦根藩主井伊家墓所については、平成20年３月28日の官報告示をもって国史跡の指定を受けた。指定の名称は「彦根藩主井伊家墓所」であり、指定対象地としては、滋賀県彦根市清涼寺(彦根市古沢町字石ヶ崎6370.26㎡)、世田谷区豪徳寺(東京都世田谷区豪徳寺3681.82㎡)、滋賀県東近江市永源寺（東近江市永源寺462.32㎡）の３箇所で、合計10514.40㎡の指定面積となっている。

このうち、彦根市に所在する清涼寺墓所については、指定以前より、諸所の石垣、墓石等に崩れや損壊が確認でき、特に史跡の中央部分の石垣については崩落し、墓石の損壊も著しい状況であった。また、近年多発している集中豪雨、台風等により崩落部分の拡大の可能性が高いと考えられる。このため、崩落等き損部分についてその範囲を確認するために緊急発掘として確認調査を行ったものである。

今回実施する確認調査箇所については、墓所範囲の南部に構築された２箇所の石垣についてである。一つは７代直惟の埋葬された区域に伴う石垣であり、もう一つは、本堂後ろの庭園から立ち上がる山肌傾斜面の上端を土留めするための石垣である。これらの崩壊の要因としては、経年変化によると考えられるものと、樹木の根の加圧によると考えられるものの二つの要因が想定できるものである。

今回実施した発掘調査については、墓所の南部に構築された２箇所の石垣であり、一つは７代直惟の埋葬された区域に伴う石垣（石垣１）。もう一つは、本堂後ろの庭園から立ち上がる山肌傾斜面を土留めするための石垣（石垣２）である。これらの石垣崩壊の要因としては、表面観察からは経年変化によると考えられるものと、樹木の根の加圧によると考えられるものの二つの要因によるものと考えられる。今回平成24年４月11日付けで現状変更許可申請をし、平成24年５月18日付け24受庁財第４号の200で許可をいただき実施したものである。

3　調査成果

今回実施した保存修理箇所については、墓所の南部に構築された２箇所の石垣であり、一つは７代直惟の埋葬された区域に伴う石垣（石垣１）。もう一つは、本堂後ろの庭園から立

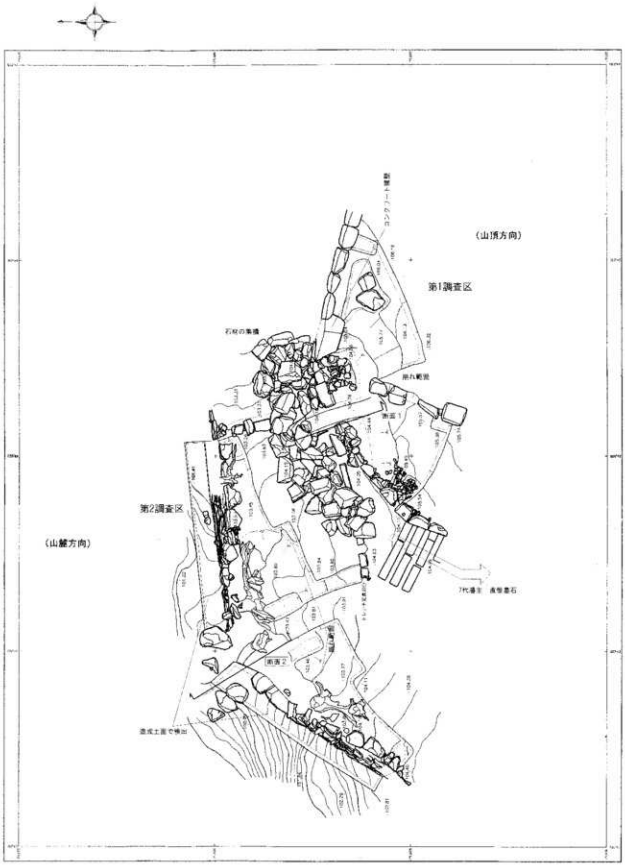


図２　発掘調査区平面図

ち上がる山肌傾斜面を土留めするための石垣（石垣２）である。これらの崩壊の要因としては、経年変化によると考えられるものと、樹木の根の加圧によると考えられるものの二つの要因によるものであり、崩落を最小限に抑え、遺構を保存するためには早急な対応が求められるものであった。平成24年４月11日付けで現状変更許可申請をし、平成24年５月18日付け24受庁財第４号の200で許可をいただき実施したものである。

修理の方法としては、事前に彦根市教育委員会を調査主体とする発掘調査（事前の測量調査も含む）を実施し、遺構検出状況の測量、写真撮影等の記録化を行ったのち、保存修理についての協議を行ってから工事を実施した。

なお、施工にあたっては、当市が設置している有識者で構成される「特別史跡彦根城跡保存整備実施計画検討委員会」の委員と協議し、指導を得て実施したものである。

発掘調査期間：平成24年６月18日～平成24年７月17日　　面積：28.75㎡
工事施工期間：平成24年７月11日～平成24年８月８日　　立面積：20㎡　平面積：28.75㎡

石垣１・２について表土を除去、崩落土の堆積を除去し、崩落面の検出を行った。

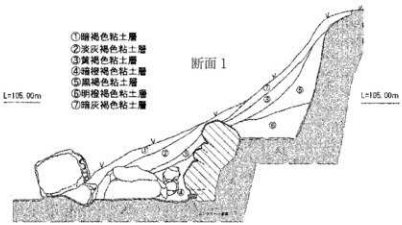
石垣１については、北端にコンクリート擁壁が確認できていたが、崩落部分の石垣基底部に当たる位置にこのコンクリート擁壁からの基礎が伸びていることが確認でき、崩落部分下部には崩落土が被った石材が散乱している状況であった。

発掘調査としては、土層観察用のセクションを残した形で崩落土を除去していき、地山を検出するという方法で行った。崩落土除去の結果、石積みの残滓と既存コンクリート擁壁から延びる基礎を検出した。石積みについては、拳大から人頭大程度の石材を使ったものであり、この石積みについてはコンクリート基礎の直上に積まれていることが確認できた。石積み裏面埋土から鉄製のボルトが出土したことから、擁壁工事直後に積まれたものであると考えられる。

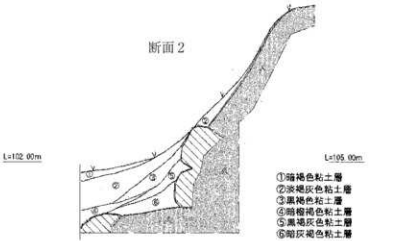
このことから、当箇所においては、指定以前の比較的新しい時期に一度修理工事がなされており、前面に堆積していた石材についてはこの以前の修理時に積まれたものであることが判明した。このため、当該箇所においては、最低２回の崩落が発生していることとなる。

石垣２については、石垣の上面を石垣２－１調査区、石垣築盛面を石垣２－２調査区とする。石垣２－１については、現況地表面からGL－５cmまでが近代以降のものと考えられる整地土であり、これは崩落部分の上に載っていることから、崩落後の客土であると考えられる。その下層GL－10cmまでで江戸時代後期と考えられる造成土面が検出できた。この造成土は表層の覆土であると考えられ、石垣石材の設置後に盛り土されており、石垣石材設置のための掘方を覆う形となっている。崩落部分の範囲についてはこの部分から検出される。この下層が、石垣築盛当初の造成となる。

石垣２－２調査区については、GL－20cmが腐葉土層であり、その下GL－30cmまでが江



第 1 調査区



第 2 調査区

図 3　石垣断面図

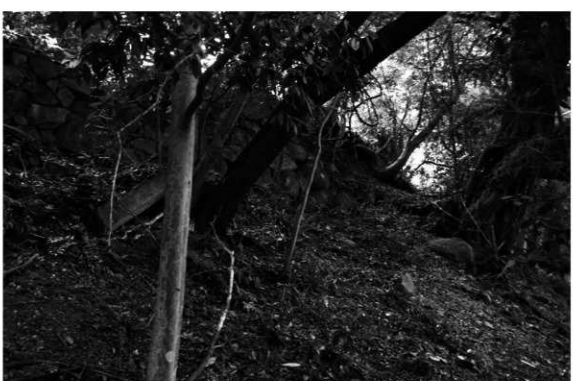
戸期の堆積土であり、その直下に当初の築盛面が検出された。この築盛面を掘り下げる形で根石が設置されており、その上層は覆土として石垣に摺り付けられている。この覆土が遺構存在時の面であり、根石を設置する掘方が確認できる面は築盛面であると考えられる。

4　まとめ

調査の結果、石垣１については、北端にコンクリートの補強が確認できていたが、崩落部分の石垣基底部に当たる位置にこのコンクリート補強からの基礎が伸びていることが確認できた。このことから、当箇所においては、指定以前に一度修理工事がなされており、前面に堆積していた石材についてはこの以前の修理時に積まれたものであることが判明した。

石垣２については、現状GL－10cmで造成土面が検出できた。この造成土は石垣石材の設置後に盛り土されており、すりつけられているため石垣石材設置のための掘方は確認できない。また、崩落部分中央で石垣基底部の平面角度が変わる状況を確認できた。このことより、石垣の基底部より天端に生えた樹木の影響に加え、石垣の平面角度が変わる場所であるために元来背面からの土圧に弱い部分で、これが崩落の原因であることが判明した。

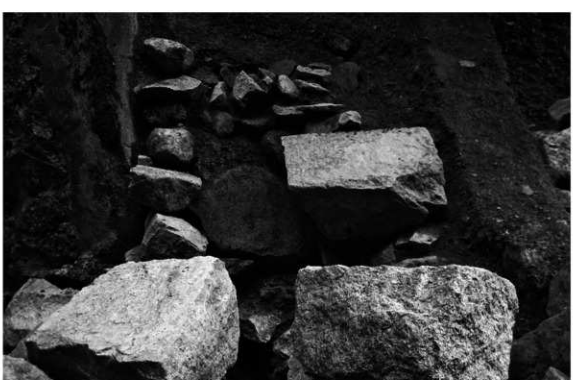
調査前状況（石垣１）



調査前状況（石垣２）

図版 2

石垣 1 南側



石垣 1 北側

石垣 2 上面完掘状況

石垣 2 築盛面完掘状況

第３章　須川遺跡（１次）

１　遺跡の概要

須川遺跡は、犬上川によって形成された自然堤防上に立地し、周辺では、湧水点が多く存在している。調査地点の遺構検出面の標高は93.30mで、基盤層は安定している。須川遺跡の東側には、竹ヶ鼻廃寺遺跡、品井戸遺跡、西今遺跡が、北側には福満遺跡があり、これらの遺跡は、犬上川右岸の自然堤防上に営まれたもので、その多くは縄文・弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。須川遺跡の近くでは、戦国時代には下街道が、近世には朝鮮人街道が縦貫しており、中世から近世の交通においても重要な位置を占める。古墳時代から中世の遺物が散布する遺跡として知られていたが、本調査としては、今回がはじめてである。

２　調査経過

今回の調査は、個人住宅の建設に伴う文化財保護法第93条の届出及び調査依頼に基づくもので、須川遺跡の第１次調査である。試掘調査の結果に基づき、遺構に影響の及ぶ建物部分の範囲を調査区として、平成24年６月29日から平成24年７月24日にかけて調査を行った。調査地は、彦根市西今町字馬場出602番１の一部、602番２に位置する。調査面積は78㎡である。

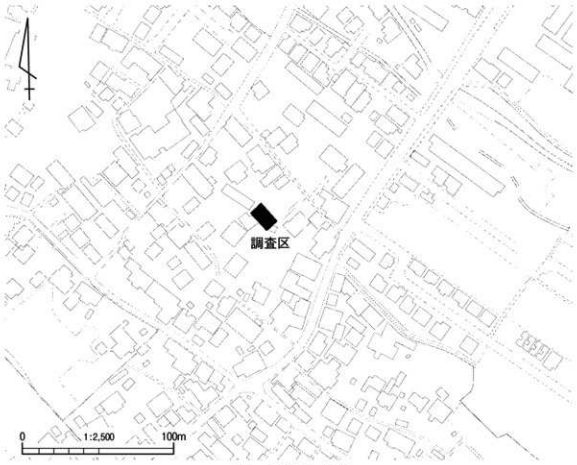


図１　調査区の位置

3　調査成果

調査区の層序としては、上層から、暗褐色粘質土層（近代の造成土層）、暗褐灰色粘質土層（中世整地土層）、黄褐色粘質土層（基盤層）となる。このうち、基盤層の上面において、古墳時代後期、奈良時代、中世の遺構を検出した。基盤層は安定しているが、西側部分では、小礫を多く含み、氾濫原であったものと推定される。

SH01　SH01は、平面方形の竪穴建物で、調査区内にかかる一部が検出された。SH02にきられている。確認できる辺の長さは2m以上である。埋土からは1～8の遺物が出土した。1・2は土師器甕、3は土師器長頸壺である。4は須恵器鉢、5は須恵器坏蓋、6・7は須恵器坏身である。8は完形の滑石製紡錘車である。径4.1cm、厚さ1.45cm、重さ40gを測り、オリーブ灰色を呈する。裏面には幅2から3mmの細長い工具痕が残り、孔の周囲はわずかに隆起する。側面の全周には顕著な擦痕がある。孔径は、表面が7mmから8mm、裏面が7mmで、わずかに表面が広く、表面からの片面穿孔であると考えられる。出土した土師器と須恵器から、SH01は、古墳時代後期（6世紀前半）の遺構であると考えられる。

SB04　SB04は、SP01、SP02などから成る掘立柱建物跡である。調査区外にまたがるため、全体形は不明であるが、1間×3間であると推定される。桁行は1.2mと小規模である。他の掘立柱建物とは異なり、主軸を東西にとる。SP01からは10、11の奈良時代の土師器坏が出土し、SB04は8世紀代の遺構であると推定される。

SB01　SB01は、調査区西側で検出された掘立柱建物跡で、ほぼ正南北を主軸とする。桁行2.1mである。柱穴からは、時期を明確に示す遺物は出土していない。

SB02　SB02は、SB03、SB04ときりあう掘立柱建物跡である。調査区外に広がるため、桁行1.75mでるが、全体形ははっきりしない。柱穴からは、時期を明確に示す遺物は出土していない。

SB03　SB03は、SB02、SB04ときりあう掘立柱建物跡である。調査区外に広がるため、桁行1.3mであるが、全体形ははっきりしない。柱穴からは、時期を明確に示す遺物は出土していない。

SB01、SB02、SB03については、梁行が不明であるが、1間×3間あるいは1間×4間の小規模なものであろう。SB03の主軸はやや東へ振るが、SB01、SB02の主軸は正南北に近い。SB01、SB02、SB03は、出土遺物に乏しく、詳細に時期をしぼりこむことは難しいが、後述するSH02とSD05との位置関係から、10～15世紀の間に位置するものと推定される。

SD05　SD05は、調査区南側で検出された溝である。東端の狭い部分では幅1.4m、最も広い部分で幅5.6m以上を測るが、調査区外へ展開していることから、溝の幅としては、もっと広い幅であると推定される。蛇行して東西に走っており、途中で溝の幅が広がっている。溝のなかには、SD03などの人為的な掘り込みによる小さな溝や段が認められる。自然流路を人為的に一部改変したもの、あるいは、人為的に掘削された溝であると考えられる。埋土は上層と下層にわかれ、上層の1層には、30cm大の礫が含まれている。下層の2層には、

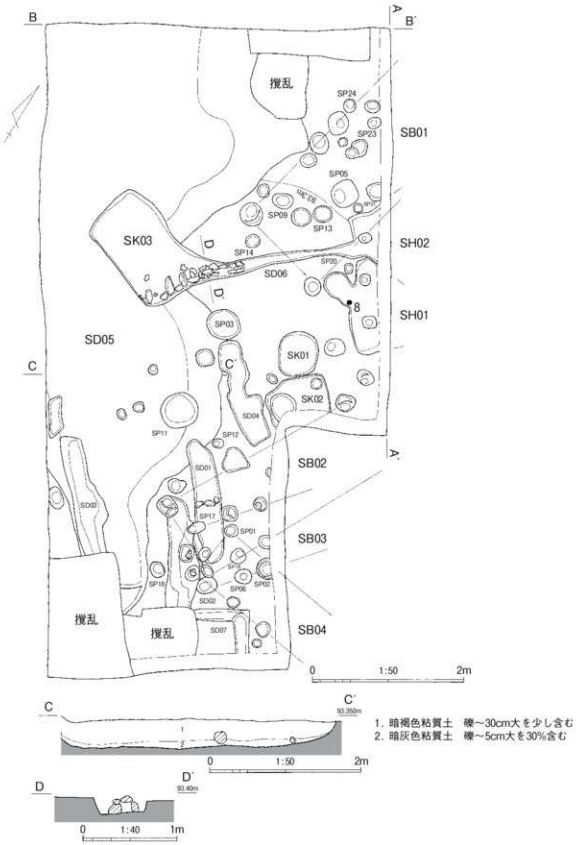


図２　調査区全体図・SD05土層断面図・SD06断面図

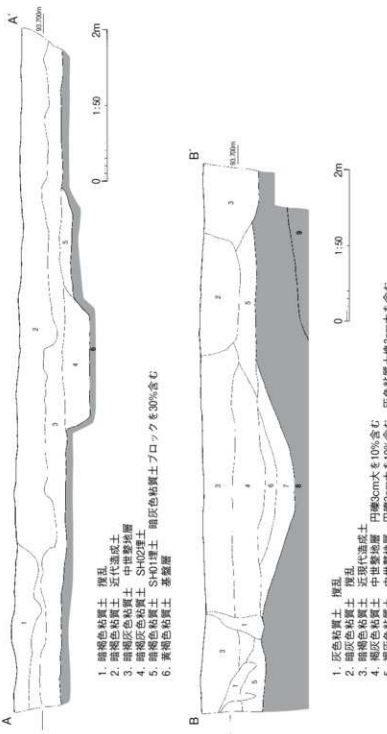


図３　調査区北壁・西壁土層断面図

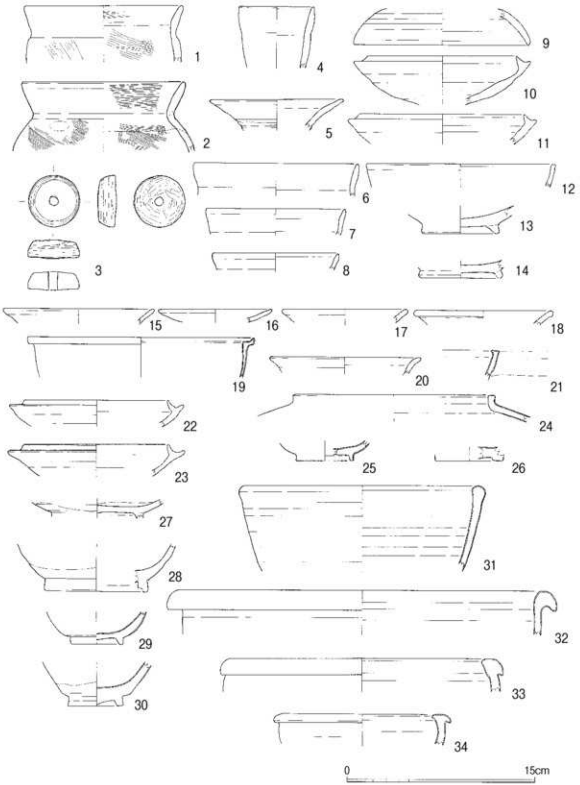

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
0
15cm

図4　出土遺物（1）

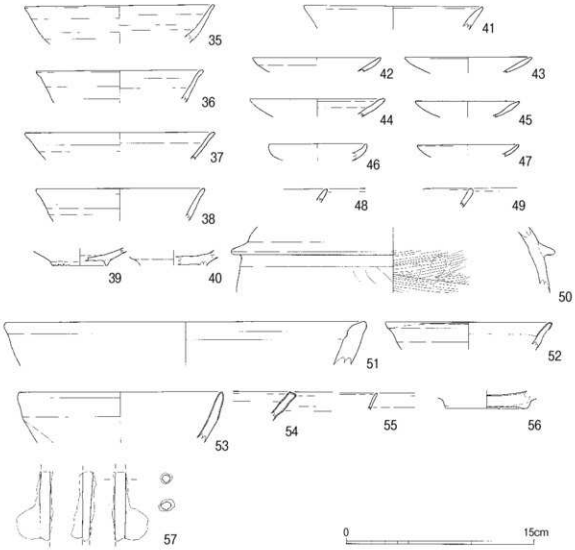


図5　出土遺物（2）

5 cm 大の礫が含まれ、グライ化が進行している。

SD05からは、35～57の遺物が出土した。このうち、35、36、38、41、48、49、50、52、53、55は溝の底から出土している。35～40は、10世紀の灰釉陶器碗と小皿である。灰釉陶器碗の復元口径は約13～15cm である。41～49は、中世の土師器皿である。色調は、にぶい橙色、浅黄橙色、灰白色のものがみられる。41の復元口径は14. 2cm と大きく、その他の復元口径は7. 6～10. 6cm におさまるものである。これらは、底部が残存しないためにはっきりしないが、大半はロクロ整形によるものであろう。50は、14世紀の土師器羽釜である。復元最大径25. 7cm を測り、にぶい黄褐色を呈する。外面には突帯を貼り付けた後に突帯から上部にナデ調整を施し、突帯以下には斜め方向の指頭圧痕がみられる。内面は、横ハケの後に指ナデがなされ、その上部は弱い横ナデが施される。内面には煤が付着している。51は、陶器擂鉢である。口縁内面に幅広の沈線をもつ。復元口径28. 2cm で、橙色を呈する。15世紀

の越前産であると推定される。52は、口縁端部に施釉される陶器碗である。釉は、黒色あるいは緑色である。53は17～18世紀の瀬戸美濃産の陶器碗である。内外面に灰色釉と緑色釉が施される。54は内外面に黄色釉が施される皿であると推定される。55と56は、施釉陶器碗である。55は白色釉、56は緑色釉である。57は、釘状の不明鉄製品である。両端を欠損し、断面は楕円形で、厚さ9mmを測る。

このように、10～18世紀の遺物が含まれ、灰釉陶器、土師器、施釉陶器が出土している。溝の底においても10～18世紀の遺物が出土しているが、17～18世紀の遺物はわずかで、一部撹乱を受けていることを考慮すると、17～18世紀の遺物は混入したものである可能性がある。少なくとも、SD05は、10～15世紀頃までの幅広い時期にわたって機能していたことがうかがわれる。また、SD05とほぼ重なる範囲において、中世の整地層である暗褐色粘質土層が確認されている。整地が行われた明確な時期は明らかにし難いが、SD05の出土遺物から、15世紀以降において、整地によって溝が埋められた可能性を考えておきたい。

SH02　SH02は、SH01をきる竪穴建物で、SD06を通してSK03とつながる。平面は方形と推定されるが、規模ははっきりしない。SB01ときりあうが、前後関係は不明である。

SD06　SD06は、石を組んだ暗渠で、トンネル状になっており、竪穴建物SH02から土坑SK03へ雨水などを流す排水溝である可能性が高い。

SK03　SD06とつながる平面方形の土坑である。SD06から土坑内へ続く石組みがともなう。長さ1.5m、幅88cmを測る。

SK03とSD06は、SD05が埋没し、整地された後に掘り込まれているため、一連の遺構であるSH02、SD06、SK03は、古くても15世紀代の遺構であると推定される。なお、SH02からは、22の須恵器坏身が出土したが、混入品であろう。また、SB02・03・04掘立柱建物との時期的な関係については、不明瞭である。

その他に、9は、SP10出土の土師器甕である。12は、SP13出土の灰釉陶器椀である。13は、SP22出土の灰釉陶器椀である。14は、SP03から出土した灰釉陶器椀である。15、17は、SP04から出土した土師器皿である。16、18は、SP07から出土した土師器皿である。19は、SP19から出土した施釉陶器である。20は、SP05から出土した施釉陶器である。21は、SP11から出土した施釉陶器である。検出面では23～26の須恵器、施釉陶器が出土し、27～34の遺物が撹乱から出土している。27は10世紀の灰釉陶器皿である。29は17世紀の丸碗、28、30は、17世紀に位置する瀬戸美濃産の天目茶碗である。32～34は、19世紀に位置する瀬戸産の施釉陶器練鉢である。近世陶器の出土から、近世においても集落が形成されていた様子がうかがわれる。

4　まとめ

今回の調査では、古墳時代後期、奈良時代、中世の集落に関連する遺構が検出され、須川遺跡が、複数の時代にまたがって遺構が形成された複合遺跡であることが明らかとなった。

須川遺跡の北東に位置する福満遺跡や東に位置する竹ヶ鼻廃寺遺跡では、竪穴建物と掘立柱建物から構成される古墳時代後期、6世紀代の集落が確認されており、当該期の集落の広がりについて検討しておく必要があろう。また、かつて存在した椿塚古墳や竹ヶ鼻廃寺遺跡出土の埴輪片から存在が推定される平地に立地する古墳と集落との関係が今後の問題になると考えられる。古墳時代後期のSH01竪穴建物からは、滑石製紡錘車が出土したが、福満遺跡においてもほぼ同時期の滑石製子持勾玉が出土しており、犬上川右岸における滑石製品の出土状況にも注意しておきたい。

中世前期から後期にわたる遺構も検出されており、東に位置する西今遺跡とあわせて、犬上川右岸の中世集落の形成を考えるうえで重要な知見が得られた。周辺の状況は未だ不明な点が多いが、須川遺跡の中世集落は、10世紀に起源をもち、当該期から活発な土地開発が行われたようである。SD05大溝の東側には、古墳時代から中世の遺構が展開しているものと推定され、今後の周辺の調査が期待されるところである。

参考文献

財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　2002『江戸時代の瀬戸窯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　2003『江戸時代の美濃窯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
山下　峰司　1995「灰釉陶器・山茶碗」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

図版 1

1　調査区全景　南から

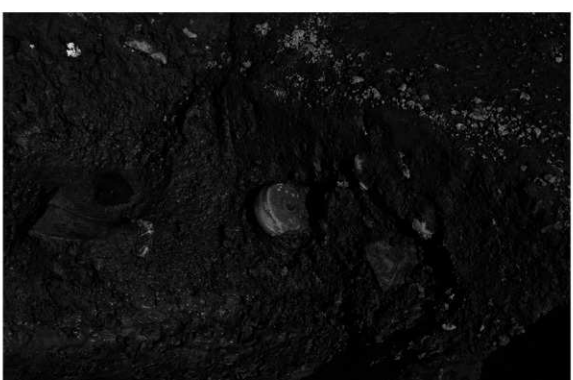
2　調査区全景　西から

1　調査風景　南から

2　調査区西壁土層　南東から

図版 3

1　SH01　南から



2　SH01石製紡錘車出土状態　南から

1　SB01　北から

2　SB02・03・04　東から

図版 5

1　SD05　東から

2　SD05土層断面　東から

1　SD06　北東から

2　SD06・SK05　南西から

図版 7

1　SH01出土遺物

2　SD05出土遺物

第４章　道ノ下遺跡

１　遺跡の概要

地理的環境

東沼波町は、彦根市のほぼ中央、南東から北西に流れる芹川の左岸に所在する。芹川は、河岸段丘を形成しながら犬上郡多賀町の久徳周辺を扇頂として西北方向に扇状地を形成している。このために川水の浸透が著しく、小河川は伏流し、水無川となっている。扇端部となる標高100m～95m付近は湧水帯となっており、それまで伏流していた川水が地表面に表出し、以下の氾濫原を形成する。このため、この湧水を利用した水田への用水が発達している地域でもある。東沼波町についてもこの位置にあたり、用水が多数確認することができる。

歴史的環境

道ノ下遺跡が所在する東沼波町周辺には、縄文時代以降、多くの遺跡が分布しており、過去人類の生活相は非常に濃いといえる地域である。

古墳時代後期になると犬上川扇状地の扇頂付近には栖崎古墳群・北落古墳靴・塚原古墳群などの群集墳が形成される。また、扇状地より下位の氾濫原部分においても古墳群は形成され、横地遺跡や段ノ東遺跡・葛籠北遺跡では円墳・方墳が検出されている。これらの古墳群

図１　調査区位置図

にはこれらの古墳群には渡来系の集団の存在をうかがわせる遺物が確認されており、扇状地の開発に関係した集団であると考えられる。

白鳳・飛鳥時代に入ると当地周辺には白鳳寺院の高宮廃寺・竹ヶ鼻廃寺が確認でき、奈良時代には官道である東山道が当地を南西から北東に貫き、尼子西遺跡では、側溝を伴った道路跡が検出されている。このころには竹ヶ鼻廃寺は大規模な掘立柱が整然とした区画で検出されており、円面硯や銅匙が、また品井戸遺跡では石帯が出土している。これらのことから竹ヶ鼻遺跡と品井戸遺跡周辺が犬上郡の中心をなす地域であったと想定できる。

中世においては、現在の高宮小学校の位置に鎌倉～戦国期に当地を支配していた土豪である高宮氏の居城、高宮城の存在が推定されており、過去の調査では堀跡が検出されている。

2　調査の経緯

今回の発掘調査については、平成24年６月４日付け発掘届が提出された個人住宅建築に伴う発掘調査であり、平成24年７月19日に試掘調査を実施し、GL－50cm で遺構面が検出されたため、本発掘調査に移行し、農地転用の後、平成24年８月20日～平成24年９月５日までの間で実施した。調査範囲としては、宅地全体の造成を伴う GL－30cm までの漉き取りが行われることから、保護層が得られないと判断し、造成範囲全体の170㎡を調査範囲とした。

3　調査成果

基本層序としては、第１層が表土としての暗灰色粘土層（水田耕作土）、第２層が暗黄灰色粘土層（床土）、第３層が遺構面の暗橙灰色粘土層となる。調査区は平坦面となり、土層についても一律の水平堆積である。

道ノ下遺跡はこれまで20を超える回数の試掘調査を実施しているが、遺構の検出は無く、今回の調査が初めての本発掘調査となった。

表土から約－50cm、標高100.20m の暗橙灰色粘土層が遺構面となっており、遺構を検出した。遺構としては、当該地における地割と同一の方向の溝 SD01、この溝とは異なる方向軸を持つ掘立柱建物 SB01 および Pit 群、土坑 SK01が検出された。

溝 SD01については、N-22°-W の方向軸を持つもので、東に34°振る犬上郡条里とは異なる方向軸を持つ。幅は概ね約80cm 前後であるが、調査区南東部分で最大約210cm と広くなる。この溝については、深さ約15cm までが残存している状況であり、第１層及び第２層上面が不連続面を成すため相当な削平を受けていることが伺える。この溝の埋没時期は、出土する遺物の最も新しいものから10世紀後半～11世紀前半の時期であると考えられる。

掘立柱建物 SB01 については、２間×１間の平面プランを持つ小規模なものである。柱間は北東面が340cm、北西面が320cm、230cm、南西面が355cm、南東面が270cm、270cm であり、桁行の支柱についてはやや外側に位置する。棟の方向としては、N-35°-E の方向軸を持ち、犬上郡条里とほぼ同一の方向軸をもっているものと判断できる。柱穴も掘方が径

30cm 前後で比較的小さなものとなっており、明瞭な柱痕は確認できなかった。

この他の Pit 群については、平面プラン等が判明し、建物となるものは確認できなかった。これは、先述しているように当該地の削平が著しく、浅い遺構については失われていることに起因すると考えられ、これは土坑 SK01にも同様のことが言え、削平によって最深部で遺構面からの深さが約 5 cm 程度となっている。

出土遺物については、溝 SD01から須恵器の小片が出土したのみであり、実測可能な遺物は出土していない。概ね10世紀代の所産と考えられるが、詳細は判断できない。

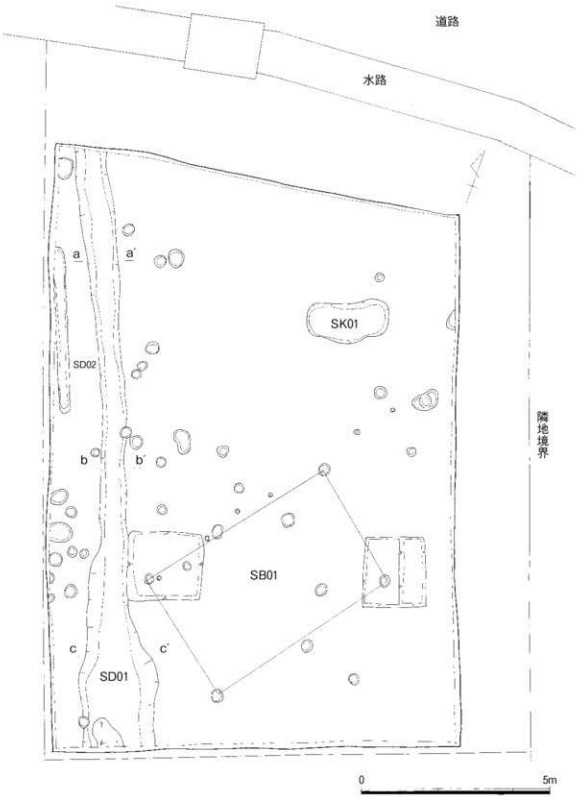


図2　調査区全体図

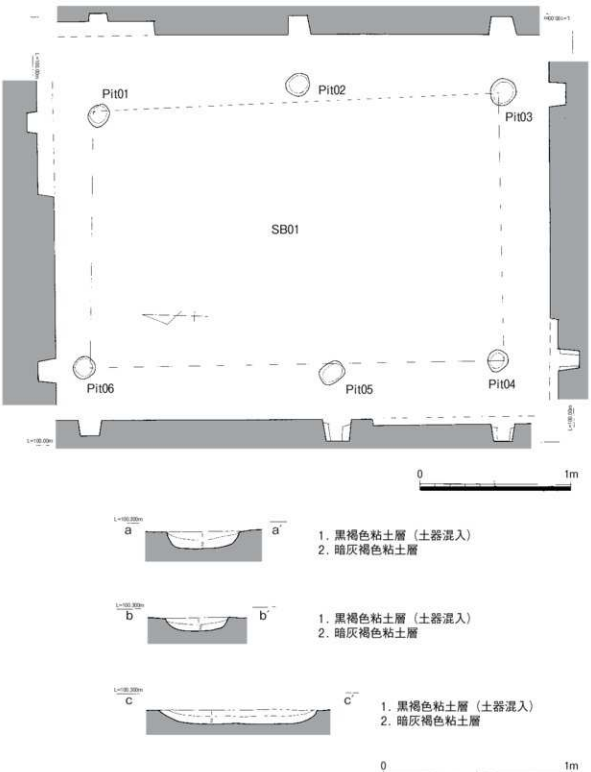


図３　SB01・SD01断面図

4　まとめ

掘立柱建物の方向軸としては犬上郡条里とほぼ同一の方向を向くものであり、関連性を考慮するべきものであるが、今回の調査が道ノ下遺跡における初回の調査であり、掘立柱建物についても当然初検出であるため、この方向軸という普遍性に関する課題には慎重にならねばならない。特に掘立柱建物という性格上、普遍性のある一定数の比較資料に基づいた検討が必要であり、今後の周辺での調査成果を待つ必要がある。また、溝SD01については、掘立柱建物と異なる方向軸を持つが、掘立柱建物の柱穴から遺物が出土しなかったため、時代の前後関係は不明である。

今回の調査は、道ノ下遺跡としての初めての調査であり、東沼波町周辺の歴史を考える上で非常に重要な資料となることであろう。遺構については、溝、掘立柱建物、共に単体での検出であったために不明な点が多いが、今後に重要な情報を与えてくれる資料である。

1　調査前状況

2　作業風景

図版 2

1　調査区全景　西から

2　溝 SD01

1　溝 SD01断面（b-b'）

2　掘立柱建物 SB01

第５章　竹ヶ鼻廃寺遺跡（８次・９次調査）

１　遺跡の概要

地理的環境

竹ヶ鼻町は彦根市のほぼ中央部を南東から北西に流れる犬上川下流の右岸微高地上に位置する。当該周辺地域は鈴鹿山系から流れる犬上川が多賀町の楢崎付近を扇頂とし、西北方向を扇の軸とする典型的な扇状地を形成する。竹ヶ鼻町から犬上郡豊郷町にかけて標高97～100ｍ付近を扇状地の境とするが、当遺跡はその扇状地外側の氾濫平野に位置しており、扇状地との境付近という立地条件から多くの湧水池が見られる。これらの湧水池が下流の水田の重要な水源となっている。遺跡の周囲の環境を見渡すと、北方には犬上川と同じく鈴鹿山系を源とする芹川が流れており、その両岸に鞍掛山（大堀山）と亀甲山（東山）が並んでいる。東・南方は、多賀大社・敏満寺付近の青竜山の丘陵に向かって平野が広がっており、西方は琵琶湖岸に向かって沖積平野が形成されている。

歴史的環境

竹ヶ鼻廃寺遺跡の所在する竹ヶ鼻町周辺は縄文時代以降、多くの遺跡が分布しており、彦根市域の中でも人類の生活相が非常に濃い地域と言える。

縄文時代は、福満遺跡で前期の大歳山式土器が確認されており、後期～晩期にかけては集落が展開する。犬上川流域では福満遺跡を中心に、土田遺跡・敏満寺遺跡（多賀町）・小川原遺跡・北落遺跡・金屋遺跡（甲良町）などが当該期に当る。土田遺跡・小川原遺跡では、甕棺墓や集石遺構などが確認されている。

弥生時代は、竹ヶ鼻廃寺遺跡で前期の土器の出土が確認されている。その後、後期の方形周溝墓などが確認されている堀南遺跡、同じく後期で竪穴住居を伴った福満遺跡がある。このように、犬上川流域では、扇状地の扇端より下流の沖積低地部に集落が展開する傾向にある。これは、扇状地の扇端部における湧水の灌漑利用との関係が考えられる。

古墳時代は、前期末に荒神山山頂付近に大型の前方後円墳である荒神山古墳が築造される。その規模・立地などから、愛知郡・犬上郡を含む湖東平野北部を代表する首長墓と考えられる。同時期の湖東平野北部に広がる集落遺跡としては、藤丸遺跡・品井戸遺跡・福満遺跡・堀南遺跡・横地遺跡・段の東遺跡・木曽遺跡（多賀町）・土田遺跡（多賀町）などがある。そして、中・後期段階になって、正法寺古墳群・葛籠北遺跡・横地遺跡・神ノ木遺跡・段ノ東遺跡・鞍掛山などに古墳が築造されるようになる。竹ヶ鼻廃寺遺跡周辺でも、JR 東海道線の南彦根駅と犬上川橋梁の中間に「椿塚」という藪があり、鉄道敷設の際の土取で石室が発見され須恵器の出土が伝わることから後期古墳が存在した可能性が高い。また、犬上川河口に位置する八坂東遺跡からは後期の埴輪が出土している。これらより、犬上川中・下流域には埋没古墳が存在する可能性がある。

犬上川流域の白鳳期の古代寺院としては高宮廃寺・竹ヶ鼻廃寺・八坂東遺跡の３箇所が比

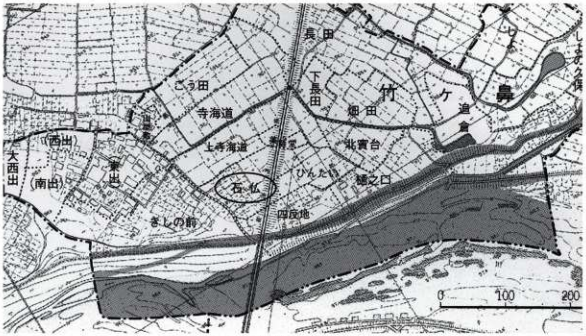


図1　竹ヶ鼻村小字図（◯調査地付近）

定地となっている。

奈良・平安時代には、竹ヶ鼻廃寺遺跡の南東2km付近に、推定古代東山道が通過しており、交通・流通面において重要な立地であった。竹ヶ鼻廃寺遺跡や品井戸遺跡では、大型の掘立柱建物群や、硯・石帯・銅匙などの官衙的遺構・遺物が確認されており、犬上郡の郡衙比定地であり、郡の中心地であったと考えられている。

2　調査経過

今回の調査は、個人住宅建設に伴う文化財保護法第93条の届出及び調査依頼に基づくもので、竹ヶ鼻廃寺遺跡の第8・9次調査である。

調査期間等は以下のとおりである。

8次調査

平成24年8月3日付けで発掘届が提出され、平成24年8月20日に試掘調査を実施した結果、GL－115cmで遺構面が検出された。遺構に影響の及ぶ建物部分の範囲を調査区として、平成24年8月20日から平成24年9月7日にかけて本発掘調査を行った。調査地は、彦根市竹ヶ鼻町字石佛292-8に位置する。調査面積は67㎡である。

9次調査

平成24年8月3日付けで発掘届が提出され、平成24年8月20日に試掘調査を実施した結果、GL－110cmで遺構面が検出された。遺構に影響の及ぶ建物部分の範囲を調査区として、平成24年8月20日から平成24年9月7日にかけて本発掘調査を行った。調査地は、彦根市竹ヶ鼻町字石佛292-7に位置する。調査面積は83㎡である。

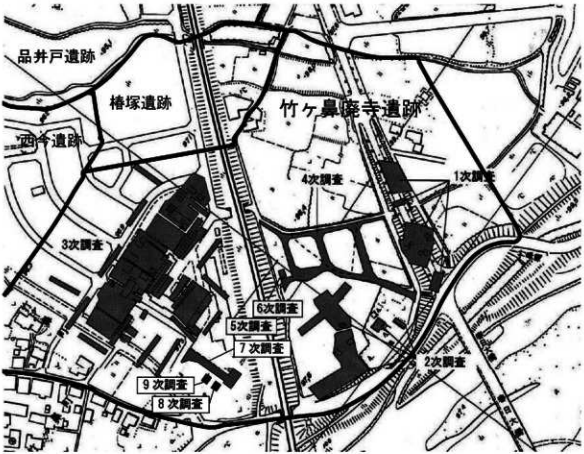


図２　竹ヶ鼻廃寺遺跡発掘調査位置図

表１　竹ヶ鼻廃寺遺跡発掘調査一覧

調査番号	調査地／調査面積（㎡）／調査原因	調査期間	調査主体	主な検出遺構・遺物
1	竹ヶ鼻町鍋ノ口1788他 11109（申請面積） 市道改良工事	1983年12月 ～ 1984年３月	彦根市教育委員会	竪穴住居（古墳後期）、掘立柱建物（時期不詳） 土師器、須恵器
2	竹ヶ鼻町四反地252-1 他 6,973（申請面積） 集合住宅建設工事	1992年８月 ～ 1993年２月	彦根市教育委員会	竪穴住居（古墳後期）、掘立柱建物（時期不詳） 瓦、土師器、須恵器、紡錘車、子持勾玉
3	竹ヶ鼻町282他 28,500（申請面積） 大学村建設及び区画整理事業	1995年５月 ～ 1995年12月	彦根市教育委員会	竪穴住居（古墳後期）、掘立柱建物・柵・井戸（奈良・平安）、 古代の郡役所（郡家）の遺構である可能性 瓦、土師器、須恵器、円面硯、鋼鏃
4	竹ヶ鼻町字北濱台159他 1790（実質発掘調査面積） 宅地造成工事	2008年10月 ～ 2009年１月	彦根市教育委員会	溝（古墳後期・奈良・平安）、土坑（古墳後期・奈良・平安）、 掘立柱建物（古墳後期・奈良・平安） 瓦、土師器、須恵器、埴輪、鉄製品、鋳造関連遺物
5	竹ヶ鼻町276-12 2.25（実質発掘調査面積） 個人住宅建設工事	2009年８月	彦根市教育委員会	土坑（江戸）・井戸（江戸） 瓦
6	竹ヶ鼻町276-11 35（実質発掘調査面積） 個人住宅建設工事	2009年10月	彦根市教育委員会	土坑（平安）・水田（平安～鎌倉） 瓦、土師器、須恵器
7	竹ヶ鼻町292他 321（実質発掘調査面積） 宅地造成工事	2012年１月 ～ 2012年２月	彦根市教育委員会	竪穴住居（古墳後期）、掘立柱建物（奈良・平安） 溝（奈良・平安）、土坑（奈良・平安）、暗渠（近世以降） 瓦、土師器、須恵器、石製品
8	竹ヶ鼻町292-8 67（実質発掘調査面積） 個人住宅建設工事	2012年８月 ～ 2012年９月	彦根市教育委員会	掘立柱建物（古墳後期） 瓦・土師器・須恵器
9	竹ヶ鼻町291-7 83（実質発掘調査面積） 個人住宅建設工事	2012年８月 ～ 2012年９月	彦根市教育委員会	竪穴住居（古墳後期）、掘立柱建物（古墳後期） 火葬土坑（中世） 瓦・土師器、須恵器、土製品、鉄製品（釘、鋼鏃）

3　調査成果

8次調査

基本層序としては、第1層が明黄褐色礫層（宅地の造成土）、第2層が褐色粘質土層（宅地の造成土）、第3層が灰黄褐色砂質土層（近現代耕作土）、第4層がにぶい黄褐色粘質土層（旧耕作土）、第5層がにぶい黄褐色砂質土層（遺構面）の5層を確認した。

表土から約－115cm、標高96.800m前後の第5層上面で遺構を検出した。検出した遺構は掘立柱建物1棟と土坑、Pit群であった。

SB1　調査区東側で検出された掘立柱建物で、棟の方位はN-24°-Wを示す。今回の調査では、調査区端にかかる形で検出されたため、建物全体のプランは判明しなかったが、検出できている範囲では梁行1間以上（約2.40m以上）×桁行2間以上（約3.77m以上）の南北棟建物である。床面積は9.04㎡以上を測る。柱間は梁側で2.4m、桁側で1.87～1.90mである。柱穴はSP1、SP2、SP3、SP4で構成され、掘り方の平面形は円形で直径48～65cm、残存深度12～24cmを測る。出土遺物は各柱穴から土師器片が出土している。建物方位と柱穴の規模・埋土などより9次調査SB1と同時期と考えられる。

この他のPit群については、平面プランが判明し、掘立柱建物に復元できるものは確認できなかった。

出土遺物は、SP9より土師器杯身（1）、SP10より土師器甕（2）、SP13より土師器杯身（3）・甕（4）が出土している。

9次調査

基本層序としては、第1層が明黄褐色礫層（宅地の造成土）、第2層が灰黄褐色砂質土層（近現代耕作土）、第3層がにぶい黄褐色粘質土層（旧耕作土）、第4層がにぶい褐色粘質土層（遺構面）の4層を確認した。

表土から約－110cm、標高96.700m前後の第4層上面で遺構を検出した。検出した遺構は竪穴建物1棟、掘立柱建物1棟、火葬土坑1基、Pit群であった。

SH16　調査区北側で検出された竪穴建物。検出高は96.5～96.6mである。今回の調査では、調査区端にかかる形で検出されたため、建物全体のプランは確認できていないが、恐らく隅丸正方形と思われる。検出面から竪穴床面までは10cm前後しか残存していないため、建物構築時の地表面からかなりの削平を受けていると思われる。そのためもあってか竪穴外周辺には垂木など建物に関連すると考えられる遺構は確認できなかった。竪穴内部については検出範囲が限られているためか主柱穴は確認されなかった。また、壁際溝や床面貼土は施されていなかったようである。出土遺物は、須恵器杯蓋（3）と図化していないが棒状の礫が出土している。棒状の礫は7次調査のSH128でも出土している。

SB1　調査区東側で検出された掘立柱建物で、棟の方位はN-23°-Wを示す。今回の調査では、調査区端にかかる形で検出されたため、建物全体のプランは判明しなかったが、検出できている範囲では梁行1間以上（1.54m以上）×桁行2間以上（3.62m以上）の南北棟

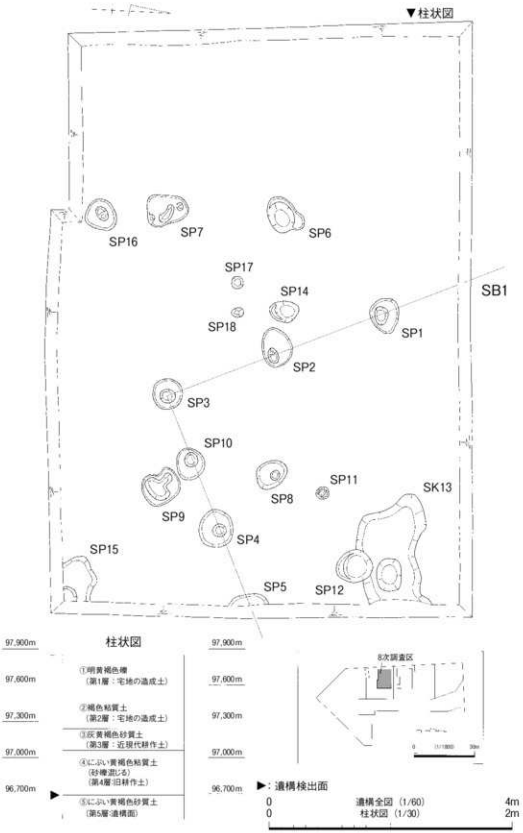


図３　８次調査遺構全図・基本層序

建物である。床面積は約5.57㎡以上を測る。柱間は梁側で1.54m、桁側で1.48～2.14mである。柱穴はSP７、SP９、SP10、SP11で構成され、掘り方の平面形は円形で直径42～53cm、残存深度16～23cm を測る。出土遺物はSP７から須恵器の杯蓋（２）が、各柱穴からは土師器片が出土している。建物方位と柱穴の規模・埋土などより８次調査SB１とは同時期と考えられる。

ST17　調査区東側で検出された火葬土坑で、平面形は長軸長11.6m、短軸長8.0m の隅丸長方形である。深さは35cmでほぼ垂直に掘り込まれている。略南北方向に軸をとり、土坑の

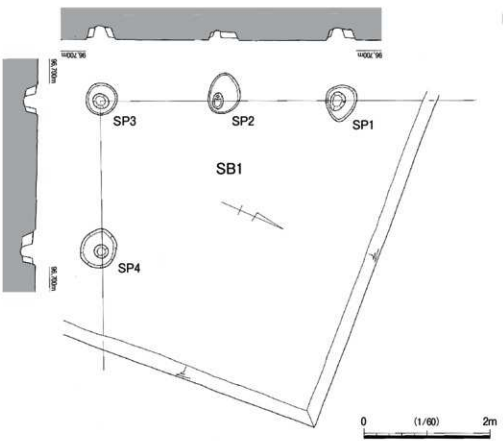


図４　８次調査掘立柱建物（SB１）平面図・断面図

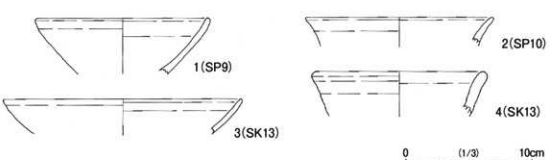


図５　８次調査出土遺物実測図

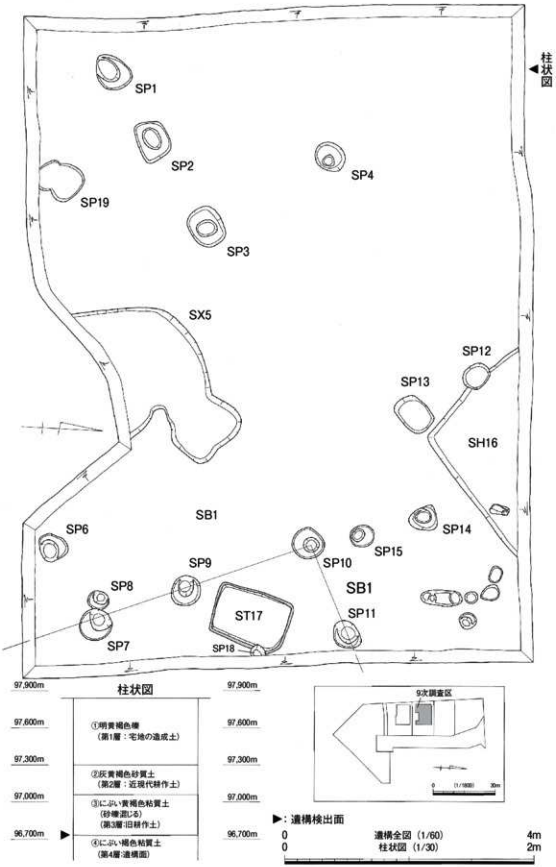


図6　9次調査遺構全図・基本層序

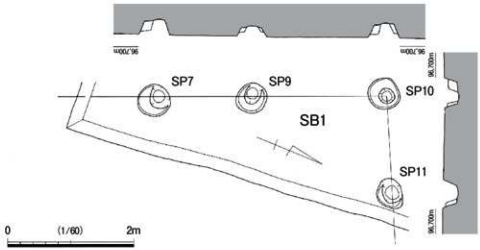


図７　９次調査掘立柱建物（SB１）平面図・断面図

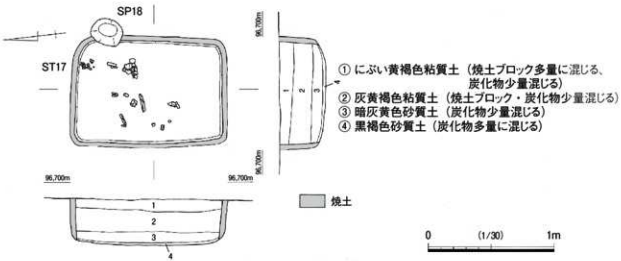


図８　９次調査火葬土杭（ST17）平面図・断面図

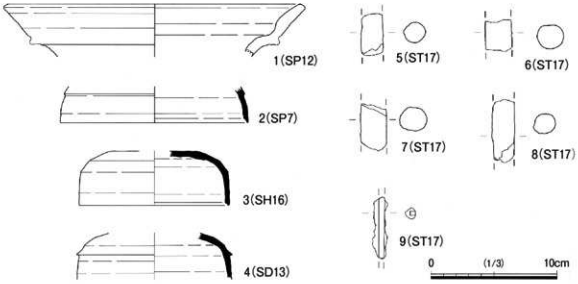


図９　９次調査出土遺物実測図

周囲は被熱により赤く変色し硬化している。遺構の埋土は第１層がにぶい黄褐色粘質土（炭化物・砂礫混じる）、第２層が灰黄褐色粘質土(炭化物混じる)、第３層が暗灰黄色砂質土(炭化物混じる)、第４層が黒褐色砂質土（炭化物多量に混じる）の４層を確認しており、最下層の４層には､炭化物が堆積している｡土坑内から棺台となるような石の出土は確認されず、代わりに底部で炭化した木材片が確認されることより、木材を棺台に利用していたことが想定される。出土遺物は、最下部の炭化層より、骨片・棒状土製品（５～８）・鉄釘（９）・銅銭（10）が散乱した状態で出土した。棒状土製品（５～８）は用途不明の土製品で、元々は直径約２cmの棒状の土製品が、長さ２～５cmに折れて分かれたもので、割れ目も含めて全体が被熱している。鉄釘は約７本出土しており、折れ曲がったものや錆びて風化したもの等が多い。銅銭（10）は「緡銭」と呼ばれる状態で出土した。本資料は14枚セットになっており、全体に被熱を受けており各銭が付着した状態となっている。一番上部の銅銭は南宋の「嘉定通寶」で嘉定元年（1208）初鋳である。一番下部の銅銭裏面は判読できない。骨片は量的に少なく、人為的に焼いてから骨片等を拾骨した可能性もあり、当該遺構が墓として認識されていたかどうかは判断が難しい。今回の調査地とこれまで実施された周辺の調査地でも同様の遺構は確認されておらず、当該遺構は単独での存在となる。

この他の Pit 群については、平面プランが判明し、掘立柱建物に復元できるものは確認できなかった。

出土遺物は SP12より土師器甕（１）、SP13より須恵器杯蓋（４）が出土している。

4　まとめ

竹ヶ鼻廃寺遺跡８・９次調査の調査結果については前章までに報告したとおりである。今回の調査地は小字「石仏」に位置し、以前より竹ヶ鼻廃寺の寺域に想定されている範囲であった。そのため、寺院関連遺構の検出が想定されたが、調査ではそのような関連遺構は確認されず、主に古墳時代後期と中世の遺構・遺物が検出された。古墳時代後期の遺構は、７次調査やこれまで周辺で実施された同遺跡の調査成果に概ね合致する成果が得られた。竹ヶ鼻廃寺遺跡の北に位置する福満遺跡では、古墳時代後期の集落が確認されており、また、近隣には後期古墳と伝わる椿塚古墳伝承地も位置する。これらを含めた犬上川右岸における古墳時代後期の集落の広がりと性格の解明が今後の課題となろう。

中世の火葬土坑は彦根市域で初めての検出となる。調査地の小字「石仏」に関連する遺構であるが、１基単独での出土であり、竹ヶ鼻廃寺遺跡の既往調査でも当該期の遺構・遺物は希薄なため、その評価は慎重にならねばならない。今後、周辺での当該期の資料の増加を待つ必要があろう。しかし、いずれにせよ彦根市域で初めての検出事例であり、当該期の葬送墓制を検討する上で重要な情報をもたらしてくれる資料が得られたことは間違いない。今後、周辺の調査が期待されるところである。

参考文献

狭川　真一　2011「第４章 火葬の諸相」『中世墓の考古学』高志書院

彦根市　2007『新修彦根市史』第１巻通史編　古代・中世

彦根市教育委員会　2013『竹ヶ鼻廃寺遺跡Ⅶ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第54集

表２　８次調査遺構一覧

遺構	平面形	規模（cm）			出土遺物	備考	掲図	写真図版
		長さ（長軸）	幅（短軸）	深さ				
SP１	円	58.0	48.0	18.3	土師器	SB１を構成する柱穴	4	
SP２	円	65.0	50.0	12.1	土師器	SB１を構成する柱穴	4	
SP３	円	52.0	50.0	22.0	土師器	SB１を構成する柱穴	4	
SP４	円	63.0	55.0	24.0	土師器	SB１を構成する柱穴	4	
SP５	円	65.0	(39.0)	—				
SP６	円	70.0	52.0	19.5				
SP７	楕円	68.0	49.0	27.1				
SP８	円	53.0	44.0	13.5				
SP９	楕円	62.0	53.0	17.9	土師器			
SP10	円	54.0	45.0	17.6	土師器			
SP11	円	22.0	20.0	4.3				
SP12	円	60.0	53.0	16.6	土師器	SK13を切っている		
SK13	不整	(175.0)	100.0	25.3	土師器	SP12に切られている		
SP14	楕円	49.0	35.0	8.7				
SP15	—	(75.0)	(55.0)	11.0	土師器			
SP16	円	55.0	50.0	16.5	土師器			
SP17	円	21.0	19.0	0.7				
SP18	円	20.0	15.0	5.9				

（　）内は残存長、又は復元数値

表３　９次調査遺構一覧

遺構	平面形	規模（cm）			出土遺物	備考	掲図	写真図版
		長さ（長軸）	幅（短軸）	深さ				
SP１	楕円	63.0	50.0	17.4	土師器			
SP２	隅丸方	66.0	52.0	13.8	土師器			
SP３	隅丸方	65.0	55.0	15.5	土師器			
SP４	円	52.0	45.0	17.7	土師器			
SX５	不整	(200.0)	162.0	9.2	土師器			
SP６	円	44.0	40.0	19.7	土師器			
SP７	円	53.0	51.0	23.0	土師器、須恵器	SB１を構成する柱穴、SP８を切っている	7	
SP８	円	35.0	(31.0)	28.7	土師器	SP７に切られている		
SP９	円	48.0	46.0	16.0	土師器	SB１を構成する柱穴	7	
SP10	円	53.0	48.0	23.0	土師器	SB１を構成する柱穴	7	
SP11	円	52.0	42.0	19.4	土師器	SB１を構成する柱穴	7	
SP12	円	45.0	38.0	35.7	土師器	SH16を切っている		
SP13	楕円	65.0	47.0	31.6	土師器、須恵器			
SP14	楕円	45.0	37.0	18.2	土師器			
SP15	円	40.0	35.0	19.1	土師器			
SH16	隅丸方	(220.0)	(180.0)	10.6	土師器、須恵器	SP12に切られている		3
ST17	隅丸方	116.0	80.0	35.0	棒状土製品、鉄釘、銅銭	SP18に切られている	8	4・5
SP18	円	25.0	(17.0)	10.2		ST17を切っている		
SP19	楕円	72.0	18.0	8.4				

（　）内は残存長、又は復元数値

図版 1

1　8次調査区遺構検出状況　東から

2　8次調査区完掘状況　東から

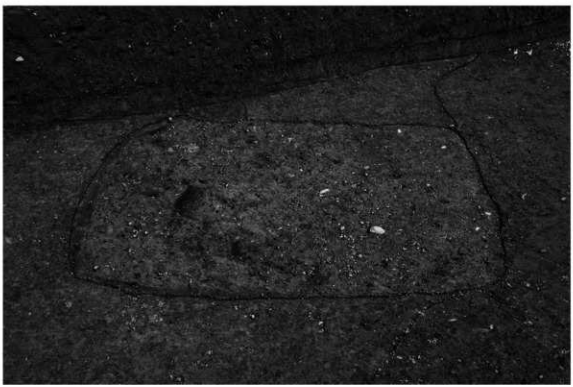
1　9次調査区遺構検出状況　東から

2　9次調査区完掘状況　東から

図版 3

1　9次調査区北壁土層断面　南東から

2　9次 SH16完掘状況　南から



1　9次調査区 ST17検出状況　西から

2　9次調査区 ST17完掘状況　南西から

図版 5

1　9次調査区 ST17壁面被熱状況　南西から

2　9次調査区 ST17出土遺物

第６章　須川遺跡（２次）

１　遺跡の概要

須川遺跡の概要については、本書第３章の第１次調査報告の記述のとおりである。今回の調査は福満神社の北西側隣接地に該当する箇所であり、第２次調査として実施した。調査地点の遺構検出面の標高は92.6mで、基盤層は第１次調査地同様に安定している。

２　調査経過

今回の調査は、個人住宅の建設に伴う文化財保護法第93条の届出及び調査依頼に基づくもので、須川遺跡の第２次調査である。試掘調査の結果に基づき、遺構に影響の及ぶ建物部分の範囲を調査区として、平成24年11月20日から平成24年12月14日にかけて調査を行った。調査地は、彦根市西今町字下出に位置する。調査面積は70㎡である。現地調査は下高大輔（彦根市教委文化財課）・樫木規秀（滋賀県立大学大学院生）が行い、以下の報告は、出土遺物を樫木が、その他を下高が行うものである。

図１　調査位置図

3　調査成果

（1）基本層序

調査区の層序は、上層から、近年の造成土層である灰色砂利土層、旧耕作土層と考えられる灰色土層、基盤層（地山）の淡黄色粘質土層となる。ただし、本調査区で検出した基盤層は、凹凸が多く見られる地形であり、凹部に土が自然堆積するとともに、一部は人為的に埋められることによって遺構面が展開することを確認した。なお、溜まり状遺構埋土を除去した一部からも遺構を検出した。遺構面からは主に７・８世紀、10世紀～12世紀と考えられる遺構群を検出した。

（2）検出遺構

検出遺構は遺構配置図及び平面図のとおり、溝・土坑・建物に伴うものと考えられるピット群を検出した。遺構埋土は灰色粘質土・茶色粘質土・ブロック状の黄色土を含む粘質土の三種類に分類することができた。先述の溜まり状遺構の埋土は基本的に茶色粘質土であるとともに検出した遺構との層序関係から、基盤層上面に直接展開する遺構群の埋土が茶色粘質土、溜まり状遺構が形成された以後に展開した遺構群埋土が灰色粘質土であることを確認した。溝に関しては３条検出したが、いずれも掘方形状を観察すると最低でも一度は埋まりかけたところを同一箇所で掘り直しが行われたものと考えられる。ピット群に関しては建物として見出すことは困難であった。

（3）出土遺物

本調査の出土遺物はすべて表５「出土遺物一覧」に記載した。このうち、遺構

表１　検出遺構一覧（溝）

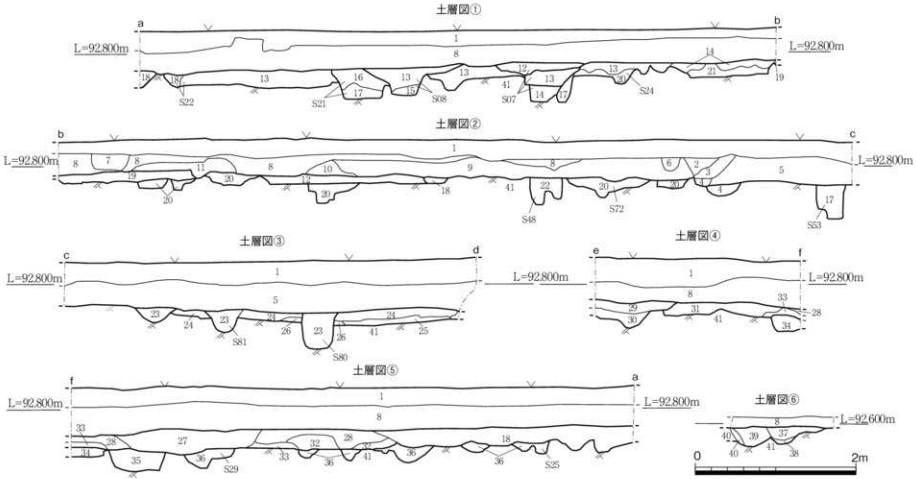
（　）は検出分　　単位：cm

遺構名	延長	幅	深さ	埋土
S07	(682)	84	16	土層(8)上
S08	(181)	34	10	土層(8)上
S21	(705)	62	13	土層(8)上

表２　検出遺構一覧（土坑・ピット）

（　）は検出分　　単位：cm

遺構名	長軸	短軸	深さ	埋土
S01	26	20	14	灰色粘質土
S02	30	29	15	灰色粘質土
S03	21	20	10	灰色粘質土
S04	20	10	8	灰色粘質土
S05	29	26	30	灰色粘質土
S06	36	25	14	灰色粘質土
S09	80	56	15	灰色粘質土
S10	33	33	31	灰色粘質土
S11	49	46	27	茶色粘質土
S12	20	17	11	灰色粘質土
S13	33	31	12	灰色粘質土
S14	36	36	9	茶色粘質土
S15	24	23	19	灰色粘質土
S16	51	48	15	灰色粘質土
S17	124	75	10	灰色粘質土
S18	45	(33)	18	茶色粘質土
S19	22	19	9	灰色粘質土
S20	21	20	13	灰色粘質土
S22	141	29	5	土層(9)上
S23	33	26	45	灰色粘質土
S24	44	44	17	土層(9)上
S25	70	34	16	土層(9)上
S26	90	(55)	10	土層(9)上
S27	33	32	20	灰色粘質土
S28	38	32	25	灰色粘質土
S29	41	(19)	22	土層(9)上
S30	33	27	4	灰色粘質土
S31	50	40	16	茶色粘質土
S32	88	58	48	土層(9)上
S33	24	9	19	灰色粘質土
S34	40	31	20	灰色粘質土
S35	27	25	5	灰色粘質土
S36	158	65	4	土層(9)(3)上
S37	(40)	(27)	19	土層(9)(3)上
S38	46	33	16	灰色粘質土
S40	25	(24)	5	灰色粘質土
S41	22	21	12	灰色粘質土
S42	41	39	35	灰色粘質土
S43	S45の埋土の一部			灰色粘質土
S44	47	30	21	灰色粘質土
S45	37	25	43	灰色粘質土
S46	29	23	27	灰色粘質土
S47	20	19	18	茶色粘質土
S48	42	(21)	34	土層(9)上
S49	35	34	40	灰色粘質土
S50	42	31	28	灰色粘質土
S51	22	19	11	灰色粘質土
S52	25	24	20	ブロック状の黄色土を含む粘質土
S53	42	26	20	土層(9)上
S54	46	42	60	灰色粘質土
S55	25	23	22	灰色粘質土
S56	39	37	25	灰色粘質土
S57	30	28	35	灰色粘質土
S58	46	43	34	灰色粘質土
S59	26	25	10	灰色粘質土
S60	27	22	24	灰色粘質土
S61	45	36	19	灰色粘質土
S62	25	24	22	灰色粘質土
S63	64	28	17	灰色粘質土
S64	61	54	44	茶色粘質土
S65	55	50	14	灰色粘質土
S67	26	24	28	灰色粘質土
S68	60	54	25	灰色粘質土
S69	27	23	30	灰色粘質土
S70	29	18	10	灰色粘質土
S71	22	20	30	灰色粘質土
S72	(52)	(27)	15	土層(9)上
S73	19	19	3	灰色粘質土
S74	(54)	51	48	灰色粘質土
S75	37	29	13	灰色粘質土
S76	57	32	60	灰色粘質土
S77	56	48	60	灰色粘質土
S78	28	(23)	32	灰色粘質土
S79	59	28	37	灰色粘質土
S80	42	22	20	土層(9)上
S81	29	13	15	土層(9)上
S82	(40)	(26)	35	灰色粘質土



1 灰色砂利土[表土(造成土)]
2 茶色粘質土(砂利石を含む)
3 灰茶色土(砂利を含む)
4 灰茶色粘質土(軟)
5 茶灰色粘質土(砂利石を含む)
6 灰色粘質土
7 暗灰色土(ビニール・炭含む)
8 灰色土[旧耕土]
9 灰茶色土(小石・河原石を含む)
10 灰茶色粘質土
11 灰茶色粘質土(炭を若干含む)
12 灰茶色粘質土
13 茶灰色粘質土
14 灰茶色土(黄色粘質土をブロック状に含む)
15 灰色粘質土
16 茶灰色粘質土(黄色粘質土をブロック状に含む-褐)
17 灰色粘質土(黄色粘質土をブロック状に含む)
18 灰茶色粘質土
19 灰茶色粘質土
20 灰茶色粘質土(黄色粘質土をブロック状に含む)
21 茶灰色粘質土(黄色粘質土をブロック状に含む)
22 灰色砂質土(黄色粘質土をブロック状に含む)
23 灰茶色粘質土
24 茶灰色粘質土
25 灰色粘質土
26 淡灰茶色粘質土
27 灰茶色粘質土(黄色粘質土をブロック状に含む)
28 灰茶色粘質土と黄色粘質土が混在
29 灰茶色粘質土[SD21上層]
30 灰色粘質土[SD21下層]
31 茶灰色粘質土[S36]
32 灰色粘質土
33 灰色粘質土(黄色粘質土をブロック状に含む)
34 茶灰色粘質土[S37]
35 灰茶色粘質土[S32上層]
36 灰色粘質土(黄色粘質土をブロック状に含む)
37 灰茶色粘質土(黄色粘質土をブロック状に含む)[S26]
38 暗灰色粘質土(黄色粘質土をブロック状に含む)[S26]
39 灰茶色粘質土[SD07]
40 茶灰色粘質土[SD07]
41 淡黄色粘質土[地山]

図2　土層図

図 3　遺構配置図

図 4　遺構平面図

の時期を決定できると考えられる遺物と残存状況が良好な実測可能な遺物については表3・4「出土遺物観察表」で詳細を記載した。以下では、さらに情報を追加する必要のある遺物について記載する。

9は湖東型無釉陶器の皿と思われる。丸みを帯びた高台を貼り付ける。高台裏には糸切り痕が残る。12の底部は未調整である。15の底部もほぼ未調整である。16と17は灰釉陶器である。16は体部下半部から外反気味に緩やかに立ち上がる。見込と高台付近を除きほぼ全体に施釉されている。見込に施釉されていないのは、重ね焼きによるものとみられる。口縁部内面と外面の一部に自然釉がかかる。やや縦長の高台を貼りつける。高台裏に糸切り痕が残る。17も体部下半部から外反気味に緩やかに立ち上がる。見込と高台付近の一部を除き、施釉される。口縁部付近に一部

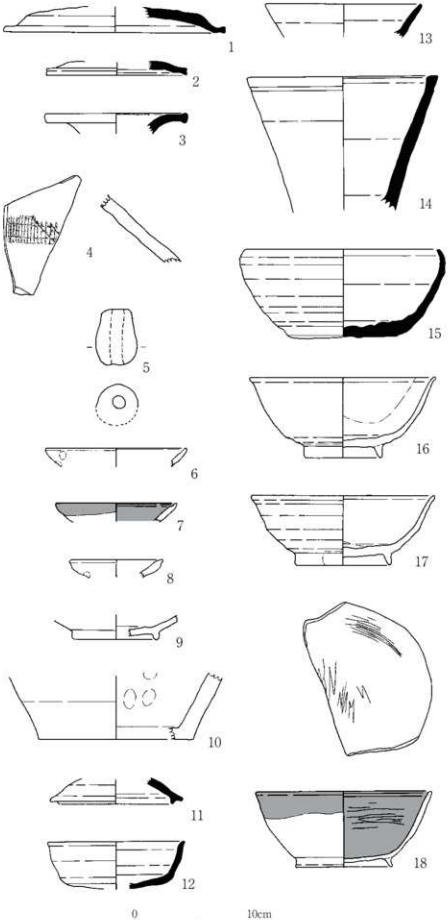


図5　出土遺物実測図1

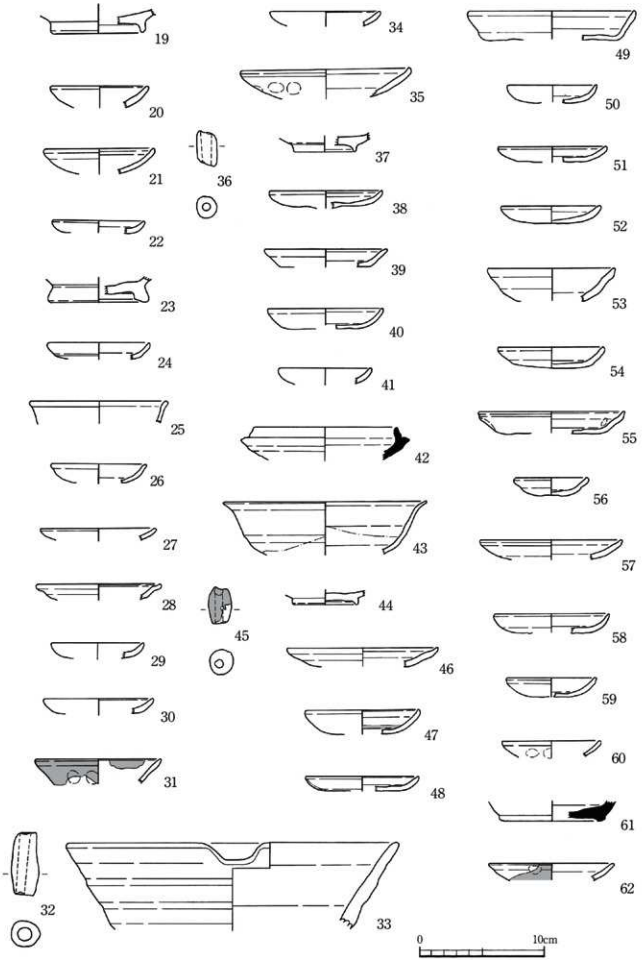

19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
0
10cm

図6　出土遺物実測図2

自然釉がかかる。16と同じく見込には施釉されていない。やや縦長の高台を貼り付ける。高台裏には、ヘラ切りと思われる痕跡が残る。16・17ともH72窯式（山下1995）と思われる。18は黒色土器である。体部下半部からやや直線的に立ち上がる。口縁部内面直下に沈線をもつ。器壁は薄い。ススは内面から外面体部上半部に付着している。ヘラミガキは内面体部と見込に認められる。内面体部は一方向のヘラミガキを加え、見込はジグザグ状にヘラミガキを加えている。高台裏を除き指頭圧痕はみられない。器表面は丁寧にヨコナデ調整している。19は湖東型無釉陶器の皿とみられる。高台は貼り付け高台である。高台裏には糸切りと思われる痕跡が残る。23は陶器椀である。器表面の一部に自然釉がかかる。厚い高台を貼り付けている。底部には糸切り痕が認められる。24は土師器皿である。体部を強くナデる。一段ナデ手法と思われ、11世紀中頃～12世紀初頭頃の所産と思われる。25は緑釉陶器の椀である。11世紀前半頃の所産である。26～28は土師器皿である。28は口縁端部を上方に肥厚させており、いわゆる「て」の字状口縁に類似する。28の年代は11世紀中頃～12世紀初頭頃と思われる。29は土師器皿である。外面にススが付着している。30は土師器皿である。器高は低い。31は土師器皿である。比較的直線的に立ち上がる。外面～口縁部にかけて黒いススが付着している。15世紀後半～16世紀前半頃の所産と思われる。32は土錘である。丁寧にヨコナデ調整が施されている。33は須恵質の片口鉢である。外面にはロクロ痕が顕著である。内面は丁寧にナデる。35は土師器皿である。口縁端部が方形状となっている。37は陶器椀である。器高が比較的低い高台を貼り付ける。38は土師器皿である。底部に粘土紐接合痕を残す。39は土師器皿である。底部と体部の境が明瞭である。40は土師器皿である。外面体部～内面全体にかけて炭素を吸着させている。43は灰釉陶器である。体部から外反気味に立ち上がる。内面には、部分的に自然釉が付着する。O53～H72窯式（山下1995）と思われ、10世紀後半～11世紀初頭頃に比定される。44は陶器椀である。丸みを帯びた高台を貼り付ける。高台裏に

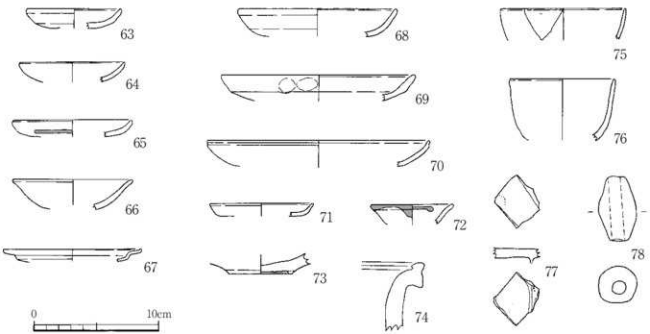


図7　出土遺物実測図3

表3－1　出土遺物観察表（土器・陶磁器）

※（　）は復元

報告No.	出土遺構	種別	器種	法量：cm 口径	法量：cm 底部径	法量：cm 器高	胎土	焼成	残存率	色調 外面	色調 内面	成形・調整	年代	備考	実測No.
1	S07上層	須恵器	杯蓋	(17.6)		(2.0)	密（微砂粒含む）	堅緻	15%	灰白色	灰白色	ロクロナデ	8ｃ後半か		4
2	S07	須恵器	杯蓋	(11.2)		(1.1)	密	堅緻	10%	淡灰白色	淡灰白色	ロクロナデ	8ｃ後半		1
3	S07上層	須恵器	長頸壺	(10.4)		(1.7)	密（微砂粒含む）	堅緻	5％	白灰色	白灰色	ロクロナデ	7ｃ後半		5
4	S07	陶器	甕			(5.2)	密（微砂粒含む）	堅緻	1％	淡黒色	灰色	ロクロナデ	14ｃ代か	常滑窯	3
6	S08	土師器	皿	(11.2)		(1.4)	やや粗	堅緻	5％	褐赤色	褐赤色	ヨコナデ・ユビオサエ			6
7	S21	土師器	皿	(7.6)		(1.5)	密（若干の雲母含む）	堅緻	5％	白褐色	白褐色	ヨコナデ・黒色化？			12
8	S21	土師器	皿	(7.4)		(1.4)	密（若干の雲母含む）	堅緻	5％	褐赤色	褐赤色	ヨコナデ・ユビオサエ			11
9	S21	陶器	皿		(6.8)	(1.8)	密	堅緻	5％	灰白色	灰白色	ロクロナデ	10ｃ中頃か	瀬東型無釉陶器	13
10	S21	陶器	壺		(12.4)	(5.2)	密（3～4mmの長石含む）	堅緻	1％	淡赤茶色	淡赤茶色	ロクロナデ	15・16ｃ代？	信楽窯	14
11	S32	須恵器	杯蓋	(10.6)		(1.1)	密	堅緻	5％	淡灰色	淡灰色	ロクロナデ	7ｃ前～中頃		19
12	S32	須恵器	杯身	(10.4)		(3.7)	密	堅緻	40%	灰白色	灰白色	ロクロナデ	7ｃ中頃～後半		17
13	S32	須恵器	杯身	(12.4)		(2.6)	密	堅緻	10%	灰白色	灰白色	ロクロナデ	7ｃ後半		21
14	S32	須恵器	鉢	(15.2)		(10.6)	密（1～3mmの白い砂粒含む）	堅緻	40%	灰白色	灰白色	ロクロナデ	7ｃ後半		20
15	S32	須恵器	鉢	15.5		7.0	密	堅緻	70%	灰白色	灰白色	ロクロナデ	7ｃ中頃～8ｃ初頭		18
16	S58	灰釉陶器	椀	(14.8)		6.3	密	堅緻	50%	白灰色（釉薬）	白灰色（素地）	ロクロナデ・施釉	10ｃ後半～11ｃ初頭		34
17	S58	灰釉陶器	椀	(14.6)		5.5	密（若干1～2mmの砂粒含む）	堅緻	70%	白灰色（釉薬）	褐黄色（素地）	ロクロナデ・施釉	10ｃ後半～11ｃ初頭		35
18	S58	黒色土器	椀	(14.0)		5.9	密（雲母含む）	堅緻	45%	褐黄色	黒色	ヨコナデ・黒色化	10ｃ後半～11ｃ初頭		36
19	S09	陶器	皿		(7.6)	(1.8)	密	やや軟	5％	白褐色	白褐色	ロクロナデ	10ｃ中頃	瀬東型無釉陶器	7
20	S10	土師器	皿	(7.8)		(1.7)	密（キラコ、微砂粒含む）	堅緻	10%	白褐色	白褐色	ヨコナデ			8
21	S10	土師器	皿	(8.8)		(1.9)	密（キラコ）	堅緻	10%	淡白褐色	淡白褐色	ヨコナデ			9
22	S28	土師器	皿	(7.4)		(1.0)	密（若干雲母含む）	堅緻	5％	褐色	褐色	ヨコナデ・ユビオサエ			15
23	S28	陶器	椀	(7.8)		(2.0)	密	堅緻	5％	淡黒灰色	淡黒灰色	ロクロナデ			16
24	S36	土師器	皿	(8.2)		(1.3)	密（雲母含む）	堅緻	5％	褐白色	褐白色	ヨコナデ	11ｃ中頃～12ｃ初頭		59
25	S36	緑釉陶器	椀	(11.0)		(1.7)	密	堅緻	5％	淡緑色	淡緑色	ロクロナデ	11ｃ前半頃		60
26	S42	土師器	皿	(7.6)		(1.4)	密（微砂粒含む）	堅緻	10%	淡褐色	褐白色	ヨコナデ			22
27	S42	土師器	皿	(9.2)		(0.9)	粗（若干雲母含む）	堅緻	5％	褐色	褐色	ヨコナデ			23
28	S42	土師器	皿	(10.0)		(1.2)	やや粗（雲母含む）	堅緻	5％	赤褐色	赤褐色	ヨコナデ	11ｃ中頃～12ｃ初頭		24
29	S44	土師器	皿	(7.4)		(1.2)	密（雲母含む）	堅緻	10%	淡黒白色	褐白色	ヨコナデ		外面にスス付着	61
30	S46	土師器	皿	(8.8)		(1.1)	やや粗	堅緻	5％	白褐色	白褐色	ヨコナデ・ユビオサエ			25
31	S50	土師器	皿	(10.0)		(1.5)	やや粗（雲母・微砂粒含む）	堅緻	10%	褐淡黒色	褐淡黒色	ヨコナデ・ユビオサエ・黒色化？	15ｃ後半～16ｃ前半	外面～口縁端部にかけてスス付着	26
33	S51	中世須恵器	片口鉢	(26.4)		(6.8)	密（1～2mmの小石含む）	堅緻	5％	灰色	灰色	ロクロナデ	11ｃ後半か	東播系須恵器か	27
34	S53	土師器	皿	(8.8)		(1.2)	密（若干雲母含む）	堅緻	10%	明褐色	明褐色	ヨコナデ			29
35	S55	土師器	皿	(13.6)		(2.2)	密	堅緻	20%	褐白色	褐白色	ヨコナデ・ユビオサエ			30

表3-2　出土遺物観察表（土器・陶磁器）

※（ ）は復元

報告No.	出土遺構	種別	器種	法量：cm 口径	法量：cm 底部径	法量：cm 器高	胎土	焼成	残存率	色調 外面	色調 内面	成形・調整	年代	備考	実測No.
37	S57	陶器	椀		(5.0)	(1.5)	密	堅緻	5％	灰白色	灰白色	ロクロナデ		調査型無釉陶器か	32
38	S57	土師器	皿	(9.0)		(1.4)	密（雲母含む）	堅緻	50%	褐色	褐色	ヨコナデ・ユビオサエ			31
39	S61	土師器	皿	(9.8)		(1.4)	密（雲母含む）	堅緻	10%	褐赤色	褐赤色	ヨコナデ			37
40	S63	土師器	皿	9.2		1.6	やや粗（雲母含む）	堅緻	50%	淡黒色	淡黒色	ヨコナデ・ユビオサエ・黒色化			38
41	S65	土師器	皿	(7.4)		(1.2)	密（雲母含む）	堅緻	10%	赤褐色	赤褐色	ヨコナデ			63
42	S65	瓶悪器	杯身	(11.4)		(2.5)	密	堅緻	5％	灰白色	灰白色	ロクロナデ	6ｃ中頃		62
43	S68	灰釉陶器	椀	(16.2)		(4.2)	密	堅緻	30%	暗白色（釉薬）	暗灰色（素地）	ロクロナデ	10ｃ後半～11ｃ初頭		40
44	S72	陶器	椀		(5.2)	(1.2)	密	堅緻	10%	灰白色	灰白色	ロクロナデ		調査型無釉陶器か	10
46	S74	土師器	皿	(12.0)		(1.5)	密（若干の雲母含む）	堅緻	10%	褐色	褐色	ヨコナデ			41
47	S75	土師器	皿	(9.2)		(1.9)	密（雲母含む）	堅緻	15%	暗褐色	暗褐色	ヨコナデ・黒色化？		被熱痕有	42
48	S76	土師器	皿	(9.0)		(1.1)	やや粗い（雲母・微砂粒含む）	堅緻	20%	褐白色	褐白色	ヨコナデ・ユビオサエ		外面体部に被熱痕有	47
49	S76	土師器	皿	(13.4)		(2.3)	密（若干の雲母・微砂粒含む）	堅緻	20%	褐白色	褐白色	ヨコナデ・ユビオサエ	14ｃ後半		45
50	S76	土師器	皿	(7.2)		(1.4)	やや粗い（雲母含む）	堅緻	15%	褐色	褐色	ヨコナデ			46
51	S76	土師器	皿	8.7		1.2	やや粗い（雲母・微砂粒含む）	堅緻	60%	褐白色	褐白色	ヨコナデ			48
52	S77	土師器	皿	(8.0)		(1.4)	やや粗い（雲母・微砂粒含む）	堅緻	20%	褐色	明褐色	ヨコナデ			49
53	S77	土師器	皿	(10.2)		(2.6)	密（若干の雲母・微砂粒を含む）	堅緻	15%	褐白色	褐白色	ヨコナデ			50
54	S77	土師器	皿	8.5		2.2	密（雲母含む）	堅緻	95%	明褐色	明褐色	ヨコナデ	11ｃ中頃～12ｃ初頭		51
55	S77	土師器	皿	(11.6)		(1.8)	やや粗い（雲母・微砂粒含む）	やや軟	20%	褐色	褐色	ヨコナデ・ユビオサエ			52
56	S77	土師器	皿	(6.0)		(1.4)	やや粗い（雲母・微砂粒含む）	堅緻	30%	褐赤色	褐赤色	ヨコナデ・ユビオサエ	11ｃ中頃～12ｃ初頭		53
57	S77	土師器	皿	(11.4)		(1.6)	やや粗い（雲母・微砂粒含む）	堅緻	15%	褐色	褐色	ヨコナデ			54
58	S77	土師器	皿	(9.2)		(1.5)	密（雲母・微砂粒含む）	堅緻	45%	褐色	褐色	ヨコナデ・ユビオサエ			55
59	S77	土師器	皿	(7.2)		1.5	密（雲母含む）	堅緻	15%	褐色	褐色	ヨコナデ			56
60	S79	土師器	皿	(7.8)		(1.3)	やや粗い（雲母・微砂粒含む）	堅緻	10%	白褐色	白褐色	ヨコナデ・ユビオサエ			43
61	S79	瓶悪器	杯身	(8.4)		(1.6)	密	堅緻	10%	灰白色	灰白色	ロクロナデ	8ｃ後半		44
62	S82	土師器	皿	(10.0)		(1.4)	密（雲母・微砂粒含む）	堅緻	10%	褐黒色	淡白褐色	ヨコナデ・ユビオサエ		外面の一部にススが付着	57
63	包含層	土師器	皿	(7.6)		(1.5)	やや粗（雲母・1～2mmの砂粒含む）	堅緻	30%	褐白色	褐白色	ヨコナデ	11ｃ中頃～12ｃ初頭		76
64	包含層	土師器	皿	(8.4)		(1.6)	やや粗（1mm程度の砂粒を含む）	堅緻	20%	褐白赤色	褐白赤色	ヨコナデ			74
65	包含層	土師器	皿	(9.6)		(1.3)	密（微砂粒含む）	堅緻	15%	赤褐色	赤褐色	ヨコナデ		外面体部にタール痕有	79

表3-3　出土遺物観察表（土器・陶磁器）

※（　）は復元

報告No.	出土遺構	種別	器種	法量：cm 口径	法量：cm 底部径	法量：cm 器高	胎土	焼成	残存率	色調 外面	色調 内面	成形・調整	年代	備考	実測No.
66	包含層	土師器	皿	(9.6)		(2.3)	密（雲母含む）	堅緻	15%	明褐色	明褐色	ヨコナデ			70
67	包含層	土師器	皿	(11.0)		(1.0)	密（若干雲母含む）	堅緻	10%	褐色	褐色	ヨコナデ・エビオサエ	11ｃ初頭～11ｃ後半		64
68	包含層	土師器	皿	(12.6)		(2.2)	やや粗（雲母・微砂粒含む）	堅緻	20%	褐白色	褐白色	ヨコナデ			78
69	包含層	土師器	皿	(15.4)		(2.0)	密（雲母・微砂粒含む）	堅緻	20%	赤褐色	赤褐色	ヨコナデ・エビオサエ			73
70	包含層	土師器	皿	(17.6)		(2.0)	密（雲母・微砂粒含む）	堅緻	20%	淡褐色	淡褐色	ヨコナデ			77
71	包含層	土師器	皿	(8.2)		(1.0)	密（雲母を含む）	堅緻	10%	赤褐色	赤褐色	ヨコナデ			75
72	包含層	土師器	皿	(6.6)		(1.6)	密（微砂粒含む）	堅緻	10%	淡褐色	淡褐色	ヨコナデ		内外面の口縁部付近にタール痕有	71
73	包含層	陶器	皿		(5.2)	(1.6)	密（雲母含む）	堅緻	5％	淡黒色	白褐色	ロクロナデ		調束型無釉陶器か？	72
74	包含層	陶器	甕			(5.4)	密	堅緻	5％	暗緑色（自然釉）	茶赤色（素地）	ロクロナデ	14ｃ中頃～15ｃ中頃	信楽窯	68
75	包含層	染付	碗	(10.0)		(2.5)	密	堅緻	10%	白色	白色	ロクロナデ			66
76	包含層	白磁	湯呑み	(8.4)		(4.8)	密	堅緻	30%	白色	白色	ロクロナデ			67
77	包含層	染付	碗			(1.2)	密	堅緻	5％	淡白色	淡白色	ロクロナデ	19ｃ中頃か	肥前陶磁器	69

表4　出土遺物観察表（土製品）

※（　）は残存

報告No.	出土遺構	種別	法量：cm 長さ	法量：cm 幅	法量：cm 器高	法量：cm 孔径	胎土	焼成	残存率	外面	内面	成形・調整	備考	実測No.
5	S07	土錘	4.4	3.3	(1.9)	1.0	やや粗（1～3mmの砂粒含む）	堅緻	50%	白褐色	白褐色	ヨコナデ		2
32	S51	土錘	4.9	2.3	2.0	1.1	密（雲母含む）	堅緻	100%	暗赤黒色	暗赤黒色	ヨコナデ		28
36	S57	土錘	2.9	1.6	1.9	0.6	やや粗（1～4mmの砂粒を含む）	堅緻	40%	白褐色	白褐色	ヨコナデ	外面底部に被熱痕有	33
45	S72	土錘	(2.9)	1.8	2.0	0.7	やや粗（雲母含む）	堅緻	40%	褐白色	褐白色	ヨコナデ	外面に被熱痕有	58
78	包含層	土錘	5.0	2.9	2.9	1.0	密	堅緻	95%	褐白色	褐白色	ヨコナデ		65

は糸切り痕が残る。45は土錘である。被熱痕が認められる。47は土師器皿である。内面底部にススが付着する。口縁端部は内側におさめる。48～51は土師器皿である。48は外面体部に被熱痕有。49は体部を強くナデる。14世紀後半の所産と思われる。52～59は土師器皿である。55・57・59は、口縁端部をつまんで、ナデ調整を施す。53・54は体部を強めにナデる。53・54は一段ナデ手法と考えられ、年代は11世紀中頃～12世紀初頭頃と思われる。61は須恵器の杯身である。高台は貼り付け高台である。8世紀後半頃に比定される。62は土師器皿である。外面にススの付着が認められる。63～72は土師器皿である。63・68は体部を若干強めにナデる。63は一段ナデ手法とみられ、11世紀中頃～12世紀初頃と思われる。65は外面の一部にタール痕が残る。66は丁寧にヨコナデ調整されている。67はいわゆる「て」の字状口縁である。11世紀初頭～11世紀後半頃の所産である。69は体部に明瞭な稜をもつ。70は口縁端部をつまんでナデ調整している。72は外面と内面の一部にタール痕があるため、灯明皿として用いら

れたと思われる。73は陶器皿である。角ばった高台を貼り付ける。74は信楽窯の甕の口縁部である。14世紀～15世紀中頃の所産と思われる。75は染付（国産）の碗と思われる。産地は不明である。近世の所産か。76は白磁（国産）の小型碗である。産地は不明である。近世の所産か。77は肥前産の高台付碗と思われる。19世紀代の所産か。

4　まとめ

須川遺跡の現況は彦根市域内の一集落である。今回の調査は須川遺跡における第２次調査であり、第１次調査についてもほぼ同時期に実施された。これまで、現在の集落形成の時期が不明であったものが、これらの調査の結果、古墳時代後期まで遡り、中世の段階で一定の集落が確立されることが確認できた。

第２次調査では、凹凸のある基盤層上で何らかの生活の営みの痕跡である土坑やピット群が確認できた。また、これらの凹部が埋まった後に溝や土坑、建物に伴うピット群が掘削された。これらの時期は出土遺物から、前者が７・８世紀頃、後者が10～12世紀頃と考えられる。灰釉陶器椀と黒色土器椀が重なった状態で出土した特徴的な遺構（SP58）も検出した。また、少数の遺構や包含層からは中世後半期の遺物も少量出土している。今回の調査では中世の中でも前半期の遺構群を主に検出したわけであるが、これらのことから中世全般にわたって当概箇所に集落が営まれ、現在の集落に繋がっていくものと考えられる。今後、具体的な中世後半期の遺構群を確認し、現存集落の形成時期のさらなる解明に期待したい。

参考文献

大阪府立近つ飛鳥博物館　2006『年代のものさし―陶邑の須恵器―』

木戸雅寿　1989「近江における15～16世紀の土器について」『中近世土器の基礎研究』Ⅴ　日本中世土器研究会

鋤柄俊夫　1997「中世食器の地域性　６―畿内周辺」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集　国立歴史民俗博物館

巽淳一郎　2004　「古代前期の土器・古代後期の土器」『古代の官衙遺跡　Ⅱ　遺物・遺跡編』奈良文化財研究所

中世土器研究会　編　1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

中野晴久　2012「常滑窯の展開」『シンポジウム　中世渥美・常滑焼をおって』日本福祉大学知多半島総合研究所

森　　隆　1986「滋賀県における古代末・中世土器」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ　日本中世土器研究会

森　　隆　1988「近江地域出土の古代末期の土器群について」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ　日本中世土器研究会

山下峰司　1995「灰釉陶器・山茶椀」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

表5　須川遺跡　第2次調査　出土遺物一覧

※片＝破片

遺構No.	須恵器					土師器　●（ハ）はハケ目 古式			土師器 中世		黒色土器			緑釉	灰釉陶器		須恵質土器		国産陶器				青磁	白磁	須恵質（輸入）	国産磁器			瓦	土製品			石製品	不明
	杯身	杯蓋	甕	鉢	片	杯	壺甕	片	皿	片	椀	皿	片	片	椀	片	椀	鉢	椀	壺甕	擂鉢	片	椀	椀	椀	椀	皿	湯呑み	平瓦	土錘	坩堝	片		
S01								●																					●?					
S02										●																								
S03					●																													
S04					●			●		●																								
S05		●						●																										
S06								●																								●		
S07		●	●		●			●（ハ）		●																			●[illegible]	●				●
S07上層		●	●		●			●																										
S08					●					●																								
S09					●			●		●				●?					●?															
S10		●						●	●	●																								
S11							●?	●（ハ）																										
S12								●（ハ）																										
S13	●	●?						●																										
S14		●?						●																								●		
S15								●（ハ）																										
S16		●?			●			●（ハ）	●	●																								
S17								●																										
S18		●?	●					●（ハ）																										
S19		●?																																
S20								●（ハ）																										
S21			●		●			●		●		●A?		●						●壺・信楽	●信楽													
S22								●																								●		
S23		●			●																													
S24			●																															
S25								●																										
S26		●						●																										
S27		●			●			●（ハ）		●																								
S28									●	●							●															●		
S29					●			●（ハ）	●	●																								
S30								●		●																								
S31					●			●																										
S32	●	●	●	●	●			●（ハ）	●	●																						●		
S32下層		●																																
S33					●					●																								
S34								●																										
S35								●																										
S36					●			●	●	●				●																	●			
S37								●																										
S38								●																										
S39								●																										
S40								●（ハ）		●																								
S41								●?																										
S42	●				●		●?（ハ）	●	●	●																								
S43																							●龍泉											
S44		●?c			●				●	●																								
S45					●			●		●			●A																					
S46		●						●	●																									
S47										●																								
S48								●		●																								
S49		●						●																										
S50								●	●				●A									●												
S51																		●東播系												●				
S52					●			●	●																									
S53									●	●										●甕・須恵器系														
S54		●	●		●			●																										
S55			●					●	●	●																								
S56								●																										
S57	●		●					●（ハ）	●	●					●?															●				
S58										●	●A				●		●								●									
S59								●																										
S60			●					●		●																								
S61								●	●	●																								
S62		●?c						●		●																								
S63		●	●						●																									
S64	●6c復						●甕	●（ハ）					●B?																					
S65	●		●					●	●																							●		
S66								●（ハ）		●																								
S67								●																										
S68			●		●			●（ハ）		●					●																			
S69								●		●																								
S70			●					●																										
S71					●																													
S72								●											●											●				
S73					●		●?	●		●																								
S74		●	●		●			●（ハ）	●	●										●壺・信楽?														
S75		●?	●						●	●		●A																						
S76		●	●					●	●	●						●														●				●
S77		●?			●			●	●	●																								
S78		●			●			●																										
S79					●			●	●	●																								
S80								●（ハ）		●																								
S81								●																										
S82	●								●																									
包含層	●	●	●		●	●	●壺	●	●	●	●A・B			●		●			●瀬戸美濃天目・大窯?	●壺・信楽	●東播系・信楽・備前?	●		●		●染付	●?	●白磁		●			●砥石?	

図版 1

1　調査区北側遺構検出状況（南西から）

2　調査区南側遺構検出状況（南から）

3　溝遺構検出状況（北から）

図版 2

4　北壁土層観察（南から）

5　遺構完掘状況（南から）

6　SP58出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	へいせいにじゅうよねんどひこねしないいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	平成24年度　彦根市内遺跡発掘調査報告書
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	彦根市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第58集
編 著 者 名	田中良輔・三尾次郎・戸塚洋輔・林昭男・下高大輔・樫木規秀
編 集 機 関	彦根市教育委員会 文化財課
所　在　地	〒522-0001　彦根市尾末町１番38号　TEL0749-26-5833
発 行 年 月 日	20140324

ふりがな	ふりがな	コード		世界測地系		調査面積	調査期間	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
西今遺跡	彦根市 西今町	25202	53	35度 14分 46秒	136度 14分 24秒	130.63㎡	20120425～ 20120528	個人住宅
史跡彦根藩主 井伊家墓所	彦根市 古沢町	25202	202	35度 16分 53秒	136度 16分 5秒	28.75㎡	20120618～ 20120717	き損箇所の 範囲確認
須川遺跡	彦根市 西今町	25202	51	35度 14分 46秒	136度 14分 13秒	78㎡ （１次） 70㎡ （２次）	20120629～ 20120724（１次） 20121120～ 20121214（２次）	個人住宅
道ノ下遺跡	彦根市 東沼波町	25202	57	35度 15分 95秒	136度 15分 22秒	170㎡	20120820～ 20120905	個人住宅
竹ヶ鼻廃寺遺跡	彦根市 竹ヶ鼻町	25202	56	35度 14分 34秒	136度 14分 33秒	67㎡ （８次） 83㎡ （９次）	20120820～ 20120907（８次） 20120820～ 20120907（９次）	個人住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	特記事項
西今遺跡	集落	平安・室町・戦国・江戸	掘立柱建物・溝・土坑	
史跡彦根藩主 井伊家墓所	墓所	江戸	石垣	
須川遺跡	集落	古墳・奈良・平安・鎌倉・室町	竪穴建物・掘立柱建物・溝・土坑	
道ノ下遺跡	集落	平安	掘立柱建物・溝・土坑	
竹ヶ鼻廃寺遺跡	集落	古墳・室町	竪穴建物・掘立柱建物・土坑	

彦根市埋蔵文化財調査報告書第58集

平成24年度　彦根市内遺跡発掘調査報告書

平成26年（2014年）３月発行

編集・発行：彦根市教育委員会文化財課
彦根市尾末町１番38号
TEL0749-26-5833
印刷・製本：西濃印刷株式会社
岐阜県岐阜市七軒町15番地
TEL058-263-4101